実学としてのアメリカ文学研究

― 歴史・人物・作品・映画から学んだこと ―

橋本賢二　編著

はじめに

橋本賢二

この論集は 2007(平成 19)年度に、大阪教育大学教養学科・欧米言語文化講座(英語圏)で開講されたアメリカ文学関連の科目（「米文学史」「米文学研究」等）を受講した学生たちが、教官の指導のもとに、「自分自身」を「文学研究」の中に描き込むことにより、誰にも真似することのできない「世界にひとつだけの論文」を書こうと試みた努力の記録です。

とかく今の時代は、インターネットなどの普及により、欲しいデータはいつでも、どこでも世界中から苦もなく、居ながらにして手に入れられる状況となっています。そんな時代には、小さなレポートにおいても、自覚のないまま「コピー＆ペースト」により提出論文を作成してしまい、そのことの非に気づかない危険性さえ潜んでいます。卒論を「数万円」、博士論文でさえ「数十万円」で代筆するという業者が現れるに至り、もう一度基本に立ち返り、整理しなおしておかなければならない事柄があるようです。

そこで私たちは今回、「誰にも真似されたり、盗まれたりすることのない、自分だけにしか書けないタイプの論文」というものを目指してみました。

学生たちの中心は「米文学史」の受講者たちであったために、「アメリカ文学の歴史」のなかから各人が最も興味を持った作家や作品、並びに時代や歴史、アメリカで生み出された「文芸」にまつわるあらゆるものもその対象とすることにしました。アメリカで生まれた「ミュージカル」や「ジャズ」、20 世紀の主役となった感のある「映画」や「歴史上の名演説」も立派な「文学」と言えるでしょう。それらを対象として、ただ従来のように内容を調べ上げ報告するのではなく、「そのことを調べる過程で自分が何を知り、学び、そしてどう成長していくのか」をその論文の中心に据え、「文章の中に調べている自分の姿が見えるように書いて下さい」というのが私の指示でした。

論文の対象は多岐にわたりました。まず巻頭には、すべての論のスタートラインとして、アメリカの国民性がどのようなものであるか、その地域的特徴は、またそれらの源流はどこにあるのかといった文化論が取り上げられています。さらに、仏語圏の学生たちはイギリスより先にアメリカを支配していたフランス文化の歴史を、また独語圏の学生たちは、「アーミッ

シュ」など、アメリカに今も残る古き時代の独特なドイツ文化を取り上げています。アメリカがイギリスから独立する以前の植民地時代の代表者として「ベンジャミン・フランクリン」を取り上げた学生たちは、古くさいように思われがちな300年近くも前の人の格言の中に、今日の若者にも有益な言葉を見いだし、その諺や教えに触れた瞬間の「成長」を示してくれています。

教職を目指す学生は熱心に「教師が主人公」の作品を捜し、その職業の扱いがヨーロッパに比べアメリカにおいては低いことを知り、その制度のしくみを調べました。「短篇小説の祖」ポーはその作品と生涯の両方が学生たちをひきつけました。ひとつの文芸でもある「ゲティスバーク演説」の政治家リンカーンも登場します。これは「私には夢がある…」の有名なスピーチで「ワシントン大行進」を導いたキング牧師の名演説と同じく、人の心を揺り動かした「ことばの力」の例でしょう。マーク・トウェイン、オー・ヘンリー、ヘンリー・ジェイムズ、フィッツジェラルド、ヘミングウェイといった、いつの時代も世界中で愛され、読まれ続けている作家たちは、また今も若者の心をしっかりととらえたようです。やはりそこには永遠に近い磁力が存在しているのでしょう。『風と共に去りぬ』は映画と小説が見事に融合した作品で、主人公スカーレットと作者ミッチェルの生き方が学生たちにひとつの指針を与えました。

1993年にアフリカ系アメリカ人女性として初めてノーベル文学賞を受賞したトニ・モリスンは、奴隷として無理やりアフリカから連れて来られたアフリカ系アメリカ人たちの、アメリカにおける地位の変遷における象徴的人物の一人です。1865年南北戦争終結により奴隷制度がなくなったあとも、平等な扱いを受けることなく100年もそのままに捨ておかれたアフリカ系の人々が、自ら文学を書き始めるようになることが20世紀も深まってからであることに学生たちは驚きを隠せません。

論集の後半は映画論になっています。「米文学史」以外の科目を受講した学生たちには、映画を対象とすることも許可しました。20世紀後半は映画が小説以上の産業となり、新たな文芸ジャンルとなった時代です。映画研究はうっかりすると浅薄なものになってしまう危険性があります。長篇小説に比べ、持ち込める言葉の量が極端に少なく、時間も２～３時間しか与えられていません。これは短篇小説の分量であり、使われる言葉もほとんどが会話となります。またこれらの映像作品と、原作や事実との区別もはっきりさせないまま「研究」を始めると、途中で瓦壊してしまいます。それゆえ扱う時には一層の注意が必要となります。リアリティからＳＦ、ドキュメンタリーから自叙伝風の作品までいろいろありますが、単なるエン

ターテインメント作品を選んだ学生はおらず、何らかの重要なメッセージを感じ取れる作品のラインナップとなっています。「製作者のメッセージと自分の学んだことを混同しないように」という注意をよく聞いて、自分を書き込みながらオリジナルな「世界にひとつの映画批評」ができました。

どんな人が、どんなことを学んだのだろうという疑問に答えるべく、各論文の頭には、執筆者のプロフィールを示すデータが貼り付けてあります。これにより、研究をする人が論文の中に生き生きと示されることを期待しています。読者はこの両者の化学反応を見ながら、またそこからひとつの景色にたどりつけることでしょう。

「文学研究」「文芸批評」「芸術評論」は、元来実生活とは関係の薄い学問のように思われがちです。「知っておけばいつの日にか人生の中でどこかで役立つはず」と言ってみても、すぐにその成果を数値化までして示すことを求められるせわしい時代潮流のなかにあっては、その有益性を証明することは苦難の業となりつつあります。そんな折に、今回の試みは一石を投じるものにはなったはずです。まだ日本中のどこでもやっていない「文学研究」と「実用性」を結びつけたこの論集の作成という小さな試みは、執筆した学生たちが「はっきりと認識した何かを学んだ」だけではなく、それをまたのちに読んでいただくことになる読者に、やがてそこから「実生活に役立つ何か」をひとつでも見つけてもらえるか、またはそのきっかけとなるならば、まずは成功だったとしておきたいと思います。

This book is the fifth annual publication of collected theses from the Faculty of American Literature in Osaka Kyoiku University. It is the result of classes taught on “A History of American Literature” and “American Literary Studies” and contains works written by both students and teaching staff. Each student chose his/her own theme from the American literary world and wrote a new type of short report. They were asked to write what they felt and learned while researching American literature.

Although it is easy nowadays to find a lot of information about any topic through the internet, in this course we asked students to write their reports based on their own individual feelings. Students were able to choose any topic in the field of American literature such as writers, people, novels, dramas, movies, or historic events. They were eager to make some contribution to the field.

Kenji Hashimoto

目　次

◆はじめに ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1
橋本賢二

文芸批評と実用科学のはざまで ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 7
橋本賢二

―――――― 植民地時代から南北戦争へ ――――――

クレヴクールのアメリカ観に習う ・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 15
矢野菜穂子

フランス人から見たアメリカの先住民、そして大地 ・・・・・・・・ 20
田中大一

ベンジャミン・フランクリンの魅力 ・・・・・・・・・・・・・・・・・ 24
福田真弓

ベンジャミン・フランクリンの生涯・格言から学んだこと ・・・・ 28
喜久田尚也

米文学から見る教師像 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 32
上鶴智子

エドガー・アラン・ポー　～推理小説と文学的特徴～ ・・・・・・ 36
槇野健太

エドガー・アラン・ポー　～大作家の生涯～ ・・・・・・・・・・・ 40
加納将貴

エイブラハム・リンカーン
～努力し、成功し、愛されたアメリカンドリーム～ ・・・・・・ 44
井上繭加

『森の生活』とアーミッシュの暮らしから学ぶもの ・・・・・・・・ 48
橋本加奈子

—— リアリズムの夜明けからロストジェネレーション、そして戦後へ ——

『トム・ソーヤーの冒険』の魅力 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 55
和田綾輔

O・ヘンリーの「最後の一葉」から学んだこと ・・・・・・・・・・・・ 59
爲家弥生

オー・ヘンリーの人生と作品からメッセージを探る ・・・・・・・・ 65
乾恵利

先駆者としてのヘンリー・ジェイムズ —新しいことへの挑戦— ・・ 70
田中めぐみ

『グレート・ギャツビー』から学ぶ人生の幸福と苦労 ・・・・・・ 74
畑美寿穂

F・スコット・フィッツジェラルド『偉大なるギャッツビー』の魅力 ・・・ 78
田中真裕

ベストセラー小説『風と共に去りぬ』の魅力とは ・・・・・・・・・ 82
木下めぐみ

マーガレット・ミッチェルとスカーレット・オハラ
～『風と共に去りぬ』にみる、二人の女性～ ・・・・・・・・ 86
源麻由

ヘミングウェイ『老人と海』に隠されたメッセージ
～私にとってのメカジキとは～ ・・・・・ 91
古谷容子

アーネスト・ヘミングウェイ　信念と勇気のメッセージ ・・・・・ 95
菱川美保

JAZZでみるアメリカの人種背景 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 99
木下加奈子

キング牧師が教えてくれる生きるヒント ・・・・・・・・・・・・・・ 103
山場友紀子

現代・ミュージカル・映画

『タイタンズを忘れない』という作品から得たもの ・・・・・・・・ 113
中尾晋吾

トニ・モリスンから学ぶ生き方 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 118
山根志保

ミュージカル ～人を魅了し続けるもの～ ・・・・・・・・・・・・・ 122
鶴崎和寿

*Stand By Me*から見る思春期像 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 126
山地宏幸

ティム・バートンの魅力 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 130
馬越由佳

映画『8 MILE』から学んだこと
～超える、超えないは自分しだいだ～ ・・・・・ 134
古賀亮

ペイ・フォワード ～トレヴァーから学んだこと～ ・・・・・・・・ 140
田中絵美

『A.I.』を通して学んだこと ―技術発展への憧れと危惧― ・・・ 146
守田静佳

『不都合な真実』―脅かされる私たちの地球― ・・・・・・・・・・ 151
池田真利子

『アイ，ロボット』～我々と機械はどのように関わるべきか？～ ・・ 158
足立亜衣莉

◆あとがき ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
橋本賢二

文芸批評と実用科学のはざまで

橋本賢二

賞味期限の改ざん、食品の偽装、耐震設計の不正工作、遊戯施設の点検整備不良。いちいち挙げていてはきりがないほどの不祥事がマスコミを賑わし、数多くの謝罪公告が途切れることなく、新聞の最下段に掲載され続けている。人々の目はこれまで漫然と存在し、たいていは看過されてきていたものごとに対し、厳しい視線を注ぐようになってきた。政治家の資金運用における不正、官僚の天下り、年金の不安。構造改革と機を一にして、あらゆる効率化を求められた企業は、仕事に対し「極限の低価格と安全な高品質」を同時に追求せざるを得ない厳しい時代へと突入した。低賃金国への労働力のアウトソーシングにより、日本の労働者の賃金は据え置かれ、好景気の実感は薄いものとなっている。

この「効率化」の波は研究・教育の現場である大学にも及び、実践的に役立たない学問に対する風当たりは強くなり、理工系では、基礎科学の分野が、企業の製品開発には直接結びつかないという理由で、予算が縮小され、人員が削減される方向にある。

文系の分野においては、小さな大学の多くが「文学部」の看板を早々と降ろし、実用向きの「コミュニケーション」や「文化」「国際」という名称で方向転換を図(はか)ってきていたが、ここにきて、それでも追いつかず「産業」とか「社会」、「情報」や「ビジネス」などの名称を組み合わせた「実用的な企業向けの学部」へと転身を始めている。

アメリカにおいてさえも、文学関係の研究書に対し、助成金がつきにくい状況が生まれてきている。「金になる学問かそうでない学問か」という明らさまな線引きが、「売れる本、売れない本」という指標によっても示される時代となってきている。

大学の教育においても、今日では「授業に対する評価」が学生によりなされ、それに対するフィードバックが教師側に求められることとなっている。

かつては芸術の一分野である文学を研究するということに対し、それほどの目標はなくても良かったのかもしれない。しかし今日ではすでに、その論文がどれくらいの「社会的・経済的・文化的影響」を与えたかさえ自己申告しなければならない時代となっている。

「文学は人の心を育むものであり、金もうけとは関係ない。経済学ばかりに操られているのは資本主義という20世紀の宗教に心が毒されているからだ。利益追求に明け暮れた人々の人生の終焉がいかに寂しいものか。ゆっくりと本を読むことが大切だ」と主張してみても、なかなか人々は振り向いてくれない。方向性が見えない小説

の分析だけではなかなか多忙な社会を満足させることができないのが現実だろう。

そこで今、文学研究と教育の現場において求められているのが、「研究・教育手法の工夫」であろう。「今日の犯罪社会を生み出したのは行きすぎた個人主義社会からもたらされた金銭至上主義でもあり、それらを是正していくものは心の教育しかない」という声をあげてみても、それらを具体的に叶えていく手法を示さなければ、時間を与えてくれない性急な社会の中では、机上の空論となってしまう。従来から行われてきた文学の研究と教育から一歩外へ踏み出して、今主張した成果が具体的に示されるような研究・教育の手法を採り入れていく時期に来ているのであろう。

そこで今回は試みとして、「アメリカ文学研究」の中に「実用科学」の側面を持った研究手法を導入してみることを考えてみた。

混迷を極める社会において、最後に頼りとなるのは「人の心」であろう。各人が自分の求めるものをしっかりと心の中に持ち、その希(ねが)いを成就するための手本に出会うことは決して無益なことではないだろう。また、個人主義が浸透し、過ぎたる自己主張が広がりつつある現代社会にあって、他者の存在や他人の心のありように目を向け、弱者の立場に配慮をすることはだんだんと難しくなりつつある。デジタルツールの普及により、直接人間的ふれあいを持つことがなくなる傾向にある今日、今一度、個性豊かな人々の中に飛び込み、他人の心の中を覗き込み、共感し、違う立場から、人々や社会や時代を眺めることは逆に重要性を増してくることだろう。小説などの作品を読んだり、歴史上の大きな出来事やそこに立ち会った人々の生き方を検証してみることのなかにも、現代の暮らしに役立つことは、きっとあるはずである。やがてそれらの積み重ねが、悲惨な犯罪が増えつつある現代社会に対するひとつの処方箋になってくれればと思う。

今回このような基本理念からスタートしたこの論集を成功に導くために、前もって教師側からは、次のような文書を配布した。

内容に関する注意

この論集のテーマは、「実学」ということにある。その前に、扱うものは、「文学」を材料とする。長篇小説、短篇、演劇、詩などの文字文学。映画、舞台、テレビ番組、ネット番組などのオーディオ・ヴィジュアルソフトなどの作品そのものから、演説、話された言葉などにも及ぶ、言説。また、それらの作品の作者。また作品が生まれた時代や背景（もちろん作品からの波及的論述をすること）。つまり、扱う素材は、なにかしらの、文学に関するものがなければいけない。

はじまりとして、文学に関する言及がなければいけない。演説なら、「それが文学に匹敵する人を動かす言葉であり、時代を象徴する名スピーチとなった」などと書き始める。そこから、人物や時代など英米事情的関心事へ移行していく。

いちばん肝心なこと

この論文は、実学ということをめざしている。文学研究の従来のやり方としては、一般には、作品の筋を追ったり、主人公の行動をなぞったり、登場人物たちの関係や心理の分析などだけをして、それで満足しているように思われている。しかし今日では、「それがなんの役に立つのか」「実生活に必要なのか」「それをやってどんな得があるのか」「金になるのか」「経済的効果を指摘せよ」「社会的、文化的影響力はあるのか」などという不満が社会や産業界から高まり、文学研究にも、厳しい時代となっている。経済学など実利的なものが持てはやされる時代だが、文学研究にも、若い人々が、「有意義だ」、「得るものがある」、　「実生活でも知っていて役立つ」、「いまの時代・社会にこそ欠けているものだ」、「なくてはならない、忘れてはいけないものが見出せる」、「人生のプラスになる」、「経済的効果だってきっとあるさ」、と思えるような部分が、きっとあるはずである。それをひとつでも実際の、繊細な、学生である若者のこころが見つけ出し、その衝撃と興奮とキャッチした瞬間のよろこびを、社会に、広く、アピールして欲しい！そして、文学研究というものが、過去の時代の産物ではなく、むしろ「心の時代である今日においてこそ必要なものなである」といったことを読む人々にも感じてもらいたい、というのがこの論集を作成するにあたっての思いである。

そこで、論文を書くときには、たとえば作者の履歴を書くだけの章であっても、そのなかで、自分が気になった、惹かれた、ひっかかった部分があるならば、素直にそこについて感想をコメントして欲しい。好きで書く人物などのなかに、魅力はきっとあるはずである。それらが各章でいくつかつながっていき、最後には、自分がほんとうにひかれたものの全体像が現れてくるはずである。

いけないのは、事実の羅列。本を読めば書いてあることの反復は、論文にはならない。分量が薄い上に、なぞっただけの論では中身はない。量が少なくても、ダイヤの原石のように、どこにも書かれていないオリジナルなコメントがあれば、それはすばらしいものになる。各章のなかでかならず一回はこのことを思い出し、自分の心と対話し、素直な感動、興味がわいた点をコメントするように。全体として最終章でまとめながら、この作品から得た、いまの時代にも、いまの時代だからこそ直接役立つと思われるエッセンスを、整理しなおすように書いていく。「学んだこと、得たもの」にはそれらの要点のみ書き、重複は避けながら、新しい一点を加えればさらによし。

言葉だけではダメで、今の時代には文字でしっかりと指示することの重要性は、対象の学生数が多くなればなるほど明確となる。さらに書き方に関する具体的な指示として次のようなものも示した。

体　裁

タイトルは、扱う作品名等を含める。文中最大フォント。氏名はやや大きく、文字間隔あけるなどする。

執筆者データを囲みで入れる。①から⑦までの数字を入れる。英語タイトル、英語名、所属（コースでなく講座を使用）、などと各項目の見出しを、できれば、いれて、そのあとにコロン：をつける。なるべくすべての項目に答える。⑦は今回の自分の論文に関して、キーワード的に、３つほど、言葉をあげる。または、文章で書く。①の英語タイトルは、イタリックにせずに、普通名詞など大文字にする。文頭大文字。

興味を持った理由　は　書いていなくてもよい。

各章のタイトルをなるべくつける。Ⅰ．Ⅱ．Ⅲ．　・・・　をあたまにつけて、言葉をつける。原則、センタリングする。導入、序論、本論、結論、などの言葉は、使用しない。はじめに　序　（無題まま）　最後に　むすび　などはタイトルとして使用してよい。

サイズや太さ文字などで工夫して、章のなかの節　は　ｉ．ⅱ．　などとして、小さくしていく。章間スペースは統一する。段落は、一文字さげる。引用は、「　」に入れる。また長いものは、上下と左に、一行あける（なるべく）。

本、映画、新聞、雑誌、のタイトルは、『老人と海 』（*The Old Man and the Sea,*1952）などとする。短篇作品は「鳥」（“Bird”）などに。

終わりの、囲み内に、⑧学んだこと、得たもの　かならずつけること。⑨に英語ｻﾏﾘｰ　あるいは　SUMMARY or summary　とつけて　⑧の要点を英訳する。文尾そろえる。

参考文献　と　大きく　センタリングする。スペースあけて、著者名、あるいは、書名からはじめる。訳者名、出版社名、できれば、（出版年）もつける。通例は、著者の苗字で、ＡＢＣ順配置。

これにより、少々の体裁の統一感は生まれた。

さらに、論文を書いたことのない学生たちに対する援助として、教師の論文を配布し、各人の論文の冒頭に示す「執筆者データ」に書き込むデザインやイメージを描きやすくするために、次のようなサンプルを示した。

ソール・ベローの人生が教えてくれる生き方

井　上　朝　日

① 英語タイトル：Saul Bellow: My Lifelong Advisor ② 英語名：Akira Inoue ③ 所属：欧米言語文化講座 英語圏 ④ 出身地：沖縄 ⑤ 特技：フランス語会話２級・バスケットボール・茶道 ⑥ 趣味：鉄道模型・切手収集・hip hop 音楽鑑賞・食べ歩き
⑦ 論文を書くにあたっての関心事： 歴史・南北戦争・時代を変えた人・リンカーン・混迷する時代のなかで、大局を見つめながら人々の利益とともに国の発展を考えることの難しさ・決断力と今日の自分・若草物語に現れている家族愛・結婚と人生と本当の幸せとは・日米の児童文学に見る文化的背景の違いと類似点・文化理解のために使えるもの・国際交流関係に役立つもの・自信が持てない自分に勇気を与えてくれる作品や人物・何に向かっていけばいいのかという迷い・夢をかなえた人に学ぶ達成するチカラ

⑧ 学んだこと、得たもの： 極貧の移民の子としてアメリカ人になったベローが、ユダヤ人として結局は英語がわからないだろうと言われた屈辱から学問に打ち込み、とうとう有名大学の英文科教授となり、ノーベル賞を受賞した。条件で不満を言う前にやってみることの大きさを知ったような気になっている。
⑨ 英語サマリー： Bellow was born in America the son of poor Russian Jewish immigrants. Despites many hardships, he never made any complaint while working hard to achieve his aim of becoming a world-famous writer. I want to live my life fully and fulfill my dream.

少々大変ではあったが、これらの細かな指示により、30 名以上の論文にもそれなりの完成度と全体的統一が生まれたと思われる。

講義を行う授業の合い間に作業を進めるという困難さのために、厳しい状況ではあったが、それなりのものが仕上がったのはよしとしたい。

これらの作業を通じて学生たちが本当に得たものがあるのかないのかは、正直不安な部分がなくもないが、やがていつかこの日の経験が脳裏によぎるものが一人でもいてくれれば幸いであるし、また、学習とは、無意識の中で生きていくものであることを考えれば、努力しただけで成果はあったのかもしれない。

Possibility of Literary Criticism as Practical Science

Kenji Hashimoto

At the end of the 20th century, the Japanese social system underwent a period of great change. At this time, the Japanese people were forced to live up to higher standards of efficiency in almost every area of their lives. Still today in the field of education, as well as in existing industries, the quality of products is expected to be secured at a high level.

As new government policy gradually put the economy ahead of all else, all of the workers here in Japan began to lose their free time. In addition, in recent years, the number of people who read books has decreased as the internet has come into wide use. Accordingly, literary criticism has begun to be seen as a useless study.

It is difficult to utilize literary studies for a practical use, but there is a way, and students should have a chance to learn how.

Previously, students were asked to consider given issues about a novel or characters under the direction of professors without knowing how to utilize the knowledge in their real lives. However, in this book, all of the students find their own themes for self-fulfillment, and try to write what they really feel they have learned, reading and studying about different areas of the American literary world. At the end of their papers, students write the lessons which they think they learned from the books.

The aim of this project is to encourage the students to relate what they learn in their literary studies to their everyday lives, and also to apply it to the future.

植民地時代から南北戦争へ

ベンジャミン・フランクリン

エドガー・アラン・ポー

エイブラハム・リンカーン

クレヴクールのアメリカ観に習う

矢野　菜穂子

① Crevecoeur’s Feelings about the Americans　②Naoko Yano　③欧米言語文化講座　仏語圏　④　　⑤　　⑥

⑦論文を書くにあたっての関心事：今や世界一の経済大国を誇るアメリカ＝しばしば憧れと反感を抱かせる不思議な国。＜反感＞環境問題、核拡散問題、内戦・紛争、貧富の差拡大などの地球規模の問題→論理性や合理性、実利のみを唯一の判断基準としてアメリカが都合良く主導権を行使。＜憧れ＞自由と民主主義、飛躍的な科学の進歩を遂げた文明社会、アメリカを目指す各界のビッグスター。・・いったいアメリカとはどんな国？アメリカ人とはどのような国民？特にアメリカは比較的新しい移民の国→アメリカ人になるということが何を意味し、アメリカ人であるということは何によって証明されるのか？彼らのアイデンティティについて単純に興味を持ち、彼らの原点に戻ってアメリカ建国の歴史を振り返ったときにクレヴクールと出会い、建国当時のアメリカ人とは何かを問うてみようと試みた。

Ⅰ．アメリカ人の定義

まず初めに、何をもってアメリカ人とするかを言及しておかねばならない。アメリカ国境内に住んでいるという地理的要素で考えると、ピルグリムファーザーズがアメリカの地に移民してくる以前から、アメリカ国土には既に原住民が住んでおり、彼らの歴史があった。教科書上では１７７６年の独立記念日をアメリカ合衆国の誕生としているが、アメリカ人はその瞬間に初めて存在し始めたのであろうか。

国家は、制度的にも意識化された「国民」という意味においても、建国とともに出来上がるというそう単純なものではない。国境内に住む人間が、その国に帰属しているという自己存在を意識化し、他者や共同体からも認められることが必要である。

法律などで「国民」としての権利や義務を与えられていれば、制度上はアメリカ人であるということが明白となる。しかし、１７８７年の合衆国憲法には、インディアンはアメリカの人口から除外され、奴隷制度の存続が暗黙のうちに承認された。１７９０年の帰化法でも、「合衆国の管轄下にあり、その領域内に２年以上居住した、外国生まれの自由な白人」に限られ、この「自由な白人」という表現にも何らかの意図が含まれている。合衆国国政調査による「人種」の分類の変遷からもわかるように、アメリカ合衆国は建国当初から、「白人」という不変で常なる存在に加えて、絶えず多様化する「非白人」から成る社会である。「アメリカ人」という国民が形成されるプロセスには、「国民」と「よそ者」とを区別する長い歴史があり、多様な人種と民族が混在しながら、独立直後から「アメリカ人」になれる者となれない者が法律によって定められていたことを忘れてはならない。

つまり、アメリカにおける国民国家形成のプロセスには長い期間を要するのである。時代を経ても、移民がアメリカ人として認められた後に、あるいは移民の子孫として自己の存在を認識する際に、自分自身のアイデンティティをいかに受け入れていくかということを考えると、たえず国民意識は変容し融合し創造され続けているといえるであろう。アメリカ人には、自らのアイデンティティについての疑問と不安が常につきまとっているのである。

ここでは１８世紀後半、ヨーロッパから来た移民が、開拓民としてアメリカでどんな生活をし、いかに自らを意識化して受け入れていくかということに注目した、クレヴクールの『アメリカの農夫からの手紙』(*Letters from an American Farmer,1782 : London*) を紹介する。アメリカ研究史の先駆者であるクレヴクールは、どのようにアメリカ人をとらえていたのだろうか。

Ⅱ．クレヴクールの半生

ミシェル・ギヨーム・ジャン・ド・クレヴクール(Michel-Guillaume Jean de Crevecoeur アメリカ名：J. Hector St. John) は１７３５年、フランス・ノルマンディー地方の都市カーンで小貴族の家に生まれた。厳格な家父長制の下、家庭でも学校でも古いしきたりの抑圧的な教育を受け、空想の世界を好むロマンティックな少年はアメリカに大きな夢を描き、陰鬱な生活に抵抗し始める。

１７５５年１９歳で早くも新大陸カナダへ渡り、その後カーンで学んだ測量と地図作成の技術を生かしてアメリカ各地をまわり、アメリカの荒野やインディアンの生活にも触れる。そして、植民地義勇軍からフランス正規軍少尉の位を得て、有能なフランス軍人として異国の地で華々しい生活を送っていた。しかし、１７５９年イギリスのウルフ将校に攻囲されたケベック攻防戦で負傷した彼は、不可解な事情で同僚から村八分のような扱いを受け、結局連隊から追放される。イギリス駐屯兵がインディアンに虐殺される現場を目撃したことに加え、この出来事が生涯彼の人間観に暗い影を落としている。

その後１７５９年の暮れにニューヨーク市を訪れ、ニューヨーク植民地の北部一帯、ヴァージニア植民地の大西洋岸一帯、後のオハイオ州地域、五大湖周辺などを旅し、後のヴァーモント州地域を探検して、インディアンとの交易にも従事した。１７６５年にニューヨーク植民地の有力者の娘と知り合ってからはアメリカ定住を決意し、フランス籍を捨ててニューヨーク植民地の市民権を獲得する。４年後に彼女と結婚し、フランス人ミシェル・ギヨーム・ジャン・ド・クレヴクールという彼のアイデンティティは消え、ジェイムズ・ヘクター・セント・ジョンというイギリス名を持ったアメリカ人に生まれ変わるのである。そこでのアメリカ農夫としての暮らしや環境の変化、移住者が新しい人間に生まれ変わるプロセスなどの詳細を記したものが、『アメリカの農夫からの手紙』である。(以下『手紙』とする。)

Ⅲ．夢の楽園「アメリカ」(―手紙３より―)

『手紙』の中でクレヴクールは、彼自身を一アメリカ農夫ジェイムズとして、当時のアメリカを鋭い観察力で客観的に捉え、緻密に表現している。つまり、ジェイムズが目にしたままの報告文という形で、そこに移り住んだ人々の生活や気質や思想、また国家との関わりなどの貴重な情報を、当時新大陸に大きな関心を寄せていたヨーロッパの人々に提供していたのである。そこには、アメリカ社会の本質を捉えた幸福や苦悩が書かれており、その後のアメリカ研究において絶大な影響力を持った。

彼が繰り返し主張するのは、アメリカで手に入れた経済的な安定であり、政治的な自由と独立、精神的な幸福である。それは、肥沃なアメリカの大地と豊かな自然が可能にしてくれる。移民は、これまでの自国の領主による搾取や貧困を脱し、市民としての権利を享受して、勤勉と法律によって彼らは驚くべき変容を遂げるのである。

『ではアメリカ人、この新しい人間は、何者でしょうか。ヨーロッパ人でもなければ、ヨーロッパ人の子孫でもありません。したがって、他のどの国にも見られない不思議な混血です。』と『手紙』には書かれてある。ここで興味深いのは、広いアメリカの国土において海岸から奥地へと目を向け、それぞれ

の地域に住む移民たちの気質の違いを客観的に描写し、かつ個人的な視点も加えて書き留めている点である。そこから環境による人の気質を読み取ることができ、いかにアメリカが開拓され発展してきたかを知るてがかりとなる。以下に地理的に異なった３つの地域に住む人々の特徴を簡単に紹介する。

①大西洋岸に住む人々の特徴 ■荒れ狂う海を相手に、大胆で冒険を好む傾向。 ■交易を好み、人との交渉は広くなる。 ■漁民、商人、都市に住む住民が多く、陸上の窮屈な生活を軽視する傾向。
②中間に位置する農耕地帯に住む人々の特徴 ■圧倒的に人数が多い。 ■素朴な土地耕作作業により純粋。 ■勤勉と利己心から立派な暮らし。 ■早くから物を覚え、商取引を行う。 ■自尊心と強情さから訴訟が多い。 ■独自の地方政治により政治経済に敏感。 ■法律は彼らを監視し、彼らは法律を遵守する。 ■宗教の穏やかな戒律と精神的自由、自由民の誇り。
③西部の辺境地に住む人々の特徴 ■追いやられた不運な人、再出発の必要、怠惰、経済上の理由で奥地へ。 ■孤立した狩猟生活のため、互いに競争し、隣人との交際を嫌い、その日暮らしの怠惰な生活を送る。 ■友情や団結はなく、政府はほとんど放任。 ■酔っ払いや怠惰が拡がると、争い、無気力、不幸が起こる。 ■人と人との争いは、腕力か時には法に訴える。 ■人と動物の争いは、人は高等な肉食獣であるから自然の摂理として野生動物を食べて暮らし、それができないときには穀物を食べて暮らす。 ■道徳観念を備えた指導者や羞恥心の抑制力から無縁のため、社会の最も忌まわしい部分を示している。

どの開拓地域も、奥地の開拓民が経験する貧弱な揺籃期と野蛮な基礎状況を経てさらに勤勉な人々に場所を譲り（追われた事情もあるが）、豊かで平和で規律ある地域へと移り変わっていく様子が理解できる。ジェイムズは、文明と自然の恩恵から孤立することのない②の自由土地保有者にこそ、アメリカの理想を見出した。彼らの労働は、自然の根本原理である利己心に基づいている。勤勉で健康で神への感謝の気持ちさえあれば誰でも、豊かな生活を手にすることができる環境がそこにはあった。新大陸アメリカの地で彼らは自由を手にし、あらゆる国の人々が融合し、一つの新しい人種となっていく。彼らの住む異質な風土の力によって、芸術、学問、宗教は独自なものとなる。自国での不本意な怠惰、奴隷的屈従、貧困、無益な労働から、豊かな生計を報酬として与えてくれる全く異なった性質の労働へと移ったのだから、アメリカ人が自分の祖国よりもいっそうこの国を愛するのは当然のことである。こうして彼らはアメリカ人としてアメリカを愛し、自己のアイデンティティを認識し始める。この瞬間、古い自己が消滅し新しい自己が出現する。絶望的な昔の生活を捨て、新大陸での希望ある新しい生活が自己の

アイデンティティの再出発点となっていった。

彼は、こうした由縁でアメリカ人を定義している。手紙３でジェイムズは、アメリカをほとんど無条件で前向きに肯定的に紹介した。しかしこれはジェイムズの一面にすぎず、彼の耕作した広大なパイン・ヒルはその後の独立革命で手放さざるを得ない状況に追いやられ、彼のアメリカ観が変化していく。

Ⅳ．開拓者の悲愴な運命（―手紙１２より―）

独立革命期、ジェイムズは生活の場を追われて財産を放棄し、家族と共に奥地へと避難していった。彼は共同体の崩壊による挫折感、戦争の恐怖と不安、それに祖国と独立革命派の両者の挟間にいるジレンマによる苦しみを生々しく手紙に託している。それらは、程度の差こそあれ、移住者が一度は味わうであろう正直で切なる感情に違いない。

夢の楽園を求めて祖国を離れ、勤勉に働いて幸せな生活を手に入れ、愛着を持ち始めたアメリカが歴史上重大な過渡期にあるとき、彼は、自分自身がここまで苦しみ悩み生きている意味について疑問を抱く。『私たちは何者でしょうか。このあわれな無防備である辺境住民の私たちは？見守っている世間にとって、私たちが息をしているかいないか、死ぬか死なないかということは、何か意味はあるでしょうか。人目に触れない孤独な場所で、私たちがどれほどの徳行を、どれほどの功績や誠実さを示してみても、何の役にも立たないのではないでしょうか。』

さらに革命の「恐るべき光景」を目にしたとき、『では人生は何なのでしょうか。・・・それはあまりにも苦痛に満ちたものです。・・・人生は単なる偶然、しかも最悪の種類の偶然のように思われます。私たちは、病気と受難と、不幸と死の犠牲になるために生まれてきているのです。』とまで悲観している。

ジェイムズは悩んだ挙句、家族でインディアンの住む奥地へと移住する決意をする。彼は、宗教や法律などに規制されない原始社会で、太古から独自の生活を守り、欲望も不満も抱くことなく生きかつ死んでいくインディアンの生活を、文明化した白人よりも多くの点で優れていると考え、「高貴な野蛮人」と称賛していた。一方、これまでの重農主義的見解から、インディアンの生活に農耕を広め、移住していく子孫には文明社会を築いてほしいというのが彼の願いであった。

結局クレヴクール自身は、双方から疑いの目をかけられ身動きができなくなり、事実上家族を見捨てる形でニューヨーク市を脱するが、スパイ容疑で牢獄に入り、やっとの思いでヨーロッパに戻ると身寄りを頼りに各地を転々として生涯を終える。

Ⅴ．『アメリカの農夫からの手紙』からわかるアメリカ観

クレヴクールの言う開拓時代の楽園アメリカには、文明社会の恩恵を受けながらも、人が自然を搾取するのではなく、むしろ豊かな自然と共生し健康な農地に感謝して生きる平和な暮らしがあった。彼は、『アメリカ人は新しい原則に基づいて行動する新しい人間です』と言っている。「楽園」と絶賛した新大陸での生活は必ずしも楽しいことばかりではなく、厳しい開拓時代を生き抜きアメリカの歴史を築き上げてきた人々に思いを馳せると、利己心を自然の根本原理であると言うクレヴクールの指摘は的確であるし、夢を抱いて誠実に労働に従事する彼らの生きる姿はとても清々しく、人としての慎ましくも幸せな暮らしぶりを思い描くことができる。

幸福と繁栄の象徴であった理想郷アメリカは、『手紙』の最後で、「共同体の崩壊」「恐ろしい光景」「悪夢」が繰り返し多用され、彼自身直面した戦争での戦慄すべき事実やアメリカ人としての苦悩を伝えて

いる。移住するまではアメリカ人でなかったことは事実であり、かつての共同体に存在した自分自身と、今存在する自分自身にはいかなる違いがあるのか。彼らはたえず自らに問い、自分なりに納得しなければならなかった。クレヴクールが独立革命時代に祖国と独立派の挟間にある自分のアイデンティティに苦悩し、原住民の生活する奥地へ移住することを決意したように、彼のアメリカ観は、物事には多面的な要素があることを私たちに教えてくれる。彼はそれぞれの立場を真に理解し十分に検討して、自らの生きる道を模索した。しかし、最後まで彼が理想としていた自由土地保有者の主張を諦めず、インディアンの住む西部開拓地にも農耕社会を広めようとしていたことで、アメリカの理想郷としての期待を裏切ることなく未来への可能性を秘めた国であることを指摘した点は、アメリカの特徴を典型的に示しているようだ。

『手紙』を通して、移民の勤勉さ、力強さ、たくましさを改めて知ることができた。当時のアメリカ人の冒険心や探究心、活力に満ちた外向性は、過酷な環境の中であっても人生を豊かに楽しみたいとする夢のある開拓時代を生きてきた彼らだからこそ培われた気質であったようだ。

⑧学んだこと：クレヴクールの好奇心旺盛な行動力、新しいものを取り入れる革新力、独立革戦争時代に生きた運命により、彼自身はアメリカでの安定した農耕生活を望んでいたが、現実には紆余曲折を経て数奇な人生を送ることとなる。だからこそ彼が実際に目で見て肌で感じた当時のアメリカの様子には説得力があり、私にとって非常に興味深いものであった。ここでは取り上げなかったが、『手紙』の中には他にも、自然や動植物への詳細にわたる観察描写、旅先での現地の人々との交流から広がるアメリカの見聞などがたくさん書かれてある。**あらゆることに興味を持ち、社交的であり、物事を肯定的・受容的に受け入れ、よく感動しよく感謝する姿勢は、時空を越えて今のグローバル社会に生きる私たちが見習うべき精神**であるように思う。１９歳で未知の世界へ飛び出したことから始まった彼のオモシロイ軌跡から、自分の人生は自らの手中にあることを信じることができる。大きなリスクを伴う移民たちの人生をかけた勇気も然りである。夢を叶えた彼らから、失敗を恐れず前に進む力、誠実に勤勉に行動することの重要性を学んだ。法律違反すれすれのマネーゲームに熱中する現代社会に、当時のような活力と元気はあるのだろうか。時代は進んだが、私たちは今こそ歴史に学び、彼らの純朴さや勤勉さに習って、夢を持って精一杯生きる喜び、幸せを噛みしめたいものだ。

⑨Summary：I think his words carry much conviction because he says what he saw, experienced and felt in the very land. We learn his way of life, that is to say, having interests for everything, a sociable character, accepting things positively or receptively, much moving and much appreciation. All his outgoing personality made his life wealthy so he lived a storming life. As I read this book, I can believe my life is in my hand. There are a lot of things to learn from the simple, honest and delight people. Now I follow their manners and I want to live wealthy and happily with my dream.

参考文献

『クレヴクール』秋山健、後藤昭次、渡辺利雄、研究社出版（1982 年）
『アメリカの歴史』有賀夏紀、油井大三郎、有斐閣アルマ（2003 年）
『他民族の国アメリカ』ナンシー・グリーン、明石紀雄、創元社（1997 年）

フランス人から見た
アメリカの先住民、そして大地

田中大一

① 英語ﾀｲﾄﾙ：**What the French Navigator Caught a Glimpse of in the Early America**
② 英語名：**Taichi Tanaka**
③ 所属：欧米言語文化講座　仏語圏
④ テーマ決定の動機：フランスに興味・関心があり、フランスとアメリカ両国に関係する歴史的事実を調べてみたかったため。

Ⅰ．始めに

今や世界一の大国となったアメリカであるが、1783年にパリ条約を結ぶまでは様々な国の植民地・領土であった。アメリカ大陸で最も勢力を奮っていたのはイギリスであるが、そのイギリスに主として対抗していたのはフランスである。

フランスはイギリスよりも早くアメリカ大陸に上陸を始め、新天地で勢力拡大を図ろうとしていた。しかしながら、早期のアメリカ大陸は「未知なる大地」であった。そこで、フランス人は当時のアメリカ大陸の存在をどのように受け止めたのか、またその大地に住んでいた先住民や自然に関してどのような感想を抱いたのかを、二人の人物を通じて垣間見ていこうと思う。

Ⅱ．偉大なる探検家　ジャック・カルティエ

一人目の人物、ジャック・カルティエ（**Jacques Cartier、1491-1557**）は、１５３４年から１５４２年の間に、カナダ探検を３回行なった。このときに彼が記したとされている報告書を基にして、後に『航海記（***Les Français en Amérique pendant la première moi tié du XVI siècle.***）』が発表された。この報告書より、早期アメリカ大陸に関する面白い部分を以下に紹介する。

「五月二十一日、我々は鳥が島（現在のファンク島）に到着した。その島は周囲全体を、壊れてばらばらとなった氷塊で出来た帯によって取り巻かれていた。その氷塊を越えて、我々は鳥を捕まえるために同島へ行った。鳥ときては、その数があまりにも多いので、同島の周囲は鳥で満ちみちており、また、上空にも、島にいる数の百倍もの鳥が群れていた。そして、半時間もたたぬうちに、二隻の舟艇は、まるで石塊でも積むように、この鳥でいっぱいになってしまった。この鳥を生のままで食べ、残りを塩漬けにして保存したが、二隻の本船のおのおので、四ないし五樽もの塩漬け肉ができるほどであった。」

この文章を読んで考えられるのは、この島周辺は人間が存在していなかった土地であり、原始的な自然状態のままであったということだ。そこにカルティエ率いる二隻の船が人類として初めて入り込んだ。そして、かつて見たことがなかった光景を目の当たりにした彼は、その時の驚きを素直に、かつ冷静に書きとめている。また、彼はこの島の周囲に生息していたペンギンのことを次のようにまとめている。

「・・・鳥が群れていた。それらのうちには鷲鳥ほどの大きさで、色は白いところと黒いところがあり、嘴は鴉に似た鳥がおり、これらはいつも海中にいて、空を飛ぶことは全然できない。というのも掌の半分くらいの大きさの翼しかないからである。だがその翼を使って飛ぶように海中を往く速さは、他の鳥が空を飛ぶのに劣らないほどであった。そしてこの鳥の脂肪の多いことといっては、驚くばかりであった。」

今となっては、私たちは気軽にペンギンを見ることができる。しかし、当時の船員はこの時初めてペンギンを目撃したのであり、「鳥のような生き物」と表現せざるを得ない様子である。しかし、カルティエ率いる船員は恐らくペンギンのような今まで見たことも無かった生き物に出会ったことにより、ますます未知なる大地アメリカに魅力を感じたに違いない。それにしても、当時の船員は得体の知らない生き物を平気で食べている。当時の食料保存法と言えば、塩漬けが最も主要であったようだが、初めて見た生き物でさえも食材にしてしまう。それはつまり、航海は非常に厳しいものであり、極寒の地で食料を手にするのは難しいことであった、ということを意味しているのだろう。

Ⅲ．先住民を分析した　アンドレ・テヴェ

二人目の人物、アンドレ・テヴェ（**André　Thevet**）は、フランスの旅行記作家である。１５５５年、ブラジルの植民を目指したヴィルガニョン一行に加わってアメリカに渡ったのだが、その時の約１年間で体験したことを書き綴った

のが、『南極フランス異聞』である。この作品は多くの人々に受け入れられ、二度、三度と再出版されている。
そこで、この作品の中から当時のアメリカ大陸に住んでいた先住民に関する報告に焦点を当て、先住民の生活の様子を探って行こうと思う。

「アメリカ人ときたら、男も女も、母親の胎内から産まれた時のままの全裸の姿で生活し、それを少しも恥ずかしいとも破廉恥だとも思っていないのである。・・・たまには、老人などが恥部を木の葉で隠しているのが見られるが、たいていの場合、そこに病気があるからである。」

これは、テヴェが実際に目撃した先住民の格好についての報告である。テヴェは、裸で居ることは恥ずかしいことで、何かを身に着けるべきであると言っている。これからわかることは、当時のヨーロッパとアメリカの間にはかなりの文明化の差があり、キリスト教信者がアメリカ大陸でキリスト教を布教するまでは、衣服を身にまとうという考えが先住民に無かったようだ。
また、彼は先住民に対し、「粗野で知恵が足りない」と発言している。大自然の中で暮らしていた先住民が、あまりにも野蛮で野生的に見えたのだろうか。

また、彼は約1年間の滞在の間に、「アメリカ人の宗教について」、「彼らの飲み食いについて」、「彼らの結婚について」、「彼らが行う儀式、墓、葬式について」、「彼らが冒されているピアンという病気について」など、様々な分野に関する調査を彼自身の視点で行っている。どの調査結果も、テヴェ自身驚く内容となったようだが、やはり先住民を無知な人々とみなしていることに変わりはなかったようだ。また、これらの調査を行うにあたり、現地の言語を巧みに操るフランス人の協力があったと言う。したがって、ここまで細かい部分まで調べ上げることができたのだろう。

Ⅳ．最後に

以上述べてきたように、フランスは早期アメリカ大陸の時代から独自の調査を始めた。様々な報告書が出版されることにより、国民もアメリカ大陸に関して興味心を抱くようになった。このことが、結果的にアメリカに植民地を設けることにつながっていったのは言うまでもない。

また、未知なる大陸に向かって行き、上陸さえした当時の探検家は、アメリカ大陸によほど強い野望を抱き、調査をすることに非常に興味があったのだろ

う。「何日間の航海になるかもわからない」、「現地で疫病にかかるかもしれない」など、不安要素は尽きることが無かったはずだ。しかしながら、事前に航海路を計算し、現地で病に冒されたとしても対処できるように、大量の治療薬を持参し探検を続けた。この様子から、探検・調査を必ず成功させようという強い意志がうかがえる。

ジャック・カルティエに関して調査を進めていくうちに、彼がフランスの小学校の教科書(*"HISTOIRE DE FRANCE" cours élémentaire*)に登場していることを発見した。偉大なフランス人の功績について書かれた文章に彼の記述もあり、あたかも彼の業績を称えているかのようだ。彼がアメリカ大陸に上陸してから既に数百年が経過している。それにも関わらず、未だにフランス人が彼を尊敬してやまないのは、彼がフランスという国に衝撃的な影響を与えた人物であり、かつ未知なる世界へと勇敢に向かっていった勇気・行動力を評価しているように感じた。

カルティエ、テヴェから学べること。それは自分自身が興味を抱いたことに対して、失敗を省みずに果敢に向かっていくことが大事であるということだ。もちろん準備段階として、事前調査や危機対応能力・対策が必要になるが、これらを全て含んだ上で目標を達成することに集中すれば、自ずと満足のいく結果を出すことができるのではないか。これは現在の私にも当てはまる。沢山の魅力が飽和している現代社会において、一生を共にしたい職業に就くことが出来るかどうかである。二人のフランス人航海士を見習い、私も目標に向かって努力し続けていこうと思う。

⑤学んだこと：行動する前にきちんと知識や能力を身に付け、
本来の目的が達成出来るよう努力すること。

⑥summary：Now that two of French navigators are quite respected because of their tremendous observations in America.Their endeavors are certainly worthy of reference, so I'd like to live harder for my goals without any regret.

参考文献

- カルチエ　テヴェ　『フランスとアメリカ大陸 1』　大航海時代業書第Ⅱ期１９
  (西本晃二、山本顕一、二宮敬　訳　　岩波書店　１９８２年発行)
- *"HISTOIRE DE FRANCE" cours élémentaire*
  (A.Bonifacio　L.Mérieult 著　　CLASSIQUES HACHETTE)

ベンジャミン・フランクリンの魅力

福田真弓

Benjamin　Franklin（1706-1790）

執筆者データ
①Benjamin　Franklin　：Why I Like Him
②名前；Mayumi　Fukuta
③所属；欧米言語文化講座　英語圏
④
⑤
⑥
⑦関心事；フランクリンの生涯、十三徳について

Ⅰ．フランクリンについて

ベンジャミン・フランクリンは、1706 年 1 月 17 日(新暦)、ボストンに 13 人兄弟の 11 番目、男子のなかでは末っ子として生まれる。基礎教育は受けたが、経済的困難のため中退して家業に従事。蝋燭工から印刷工助手に転進し、読書の喜びを知る。

伯父のジェームズと組んで急進的リベラル・ジャーナリズム活動を行うが、やがてジェームズと対立してボストンを出奔。フィラデルフィアで旗揚げして後、数年にして早くも独立の印刷工場・新聞発行者となり、功利主義的な美徳を説いた『貧しきリチャードの暦』の作者として名を挙げる。

三十歳にしてペンシルヴェニア州議会の書記となり、啓蒙的活動を盛んに行

いつつ財産と名声を高める。1751 年　州議会の議員となり、54 年にはフレンチ・インディアン戦争に対抗するべく召集されたオルバニー会議にペンシルヴェニア代表として参加。

戦後イギリス本国の統制が強まると、フランクリンも次第に独立運動に傾斜していき、1774 年、フィラデルフィアの第一回大陸会議では委員を務める。76 年の独立宣言起草にあたっては起草者トマス・ジェファーソンに協力して多くの助言を行い、外交官としてヨーロッパに派遣されてフランス宮廷の援助を獲得。フランスの独立戦争への協力・参戦と、他の諸国の中立を成功させる。1790 年 4 月 17 日、84 才で死去。葬儀は国葬とされた。

興味を持った理由

フランクリンの「人生を幸せへと導く **13** の習慣」を以前読んだことがあり、彼の考え方、教えについてもっと学びたいと思ったからである。時代は違うのに現代でも通ずるところがたくさんあり、ためになる本だと思った。また、フランクリンは、日本ではアメリカ独立宣言を起草した 1 人としてよく知られているが、実は、アメリカ合衆国の政治家、外交官、物理学者、気象学者などと、様々な顔を持っている。フランクリンがアメリカの建国の父の一人と呼ばれるようになったその人生を知りたいと思った。

Ⅱ．フランクリンの十三徳

フランクリンが自発的に１３の戒律を作って、自ら習慣となるまで実践した。

（フランクリン自伝より）

1.節制:頭や体が鈍くなるほど食べないこと。

2.沈黙:他人あるいは自分に利益にならないことは話さないこと。

3.規律:自分の持ち物はすべて置き場所を決めておくこと。仕事はそれぞれ時間を決めて行うこと。

4.決断:なすべきことはやろうと決意すること。決意したことは、必ずやり遂げること。

5.節約:他人や自分に役立つことのみお金を使うこと。すなわち、無駄づかいはしないこと。

6.勤勉:時間を無駄にしないこと。いつも有益なことに時間を使うこと。無益な行動をすべて止めること。

7.誠実:だまして人に害を与えないこと。清く正しく思考すること。口にする言葉も、また同じ。

8.正義:不正なことを行い、あるいは、自分の義務であることをやらないで、他人に損害を与えないこと。

9.中庸:何事も極端でないこと。たとえ相手に不正を受け、激怒するに値すると思ってもがまんしたほうがよいときはがまんすること。

10.清潔:身体、衣服、住居、を不潔にしないこと。

11.冷静:つまらないこと、ありがちな事故、避けられない事故などに心をとりみださないこと。

12.純愛:性の営みは、健康のためか、子供をつくるためにのみすること。性におぼれ、なまけものになったり、自分や他人の平和な生活を乱したり、信用を失くしたりしないこと。

13.謙譲:イエスとソクラテスを見習うこと。

ベンジャミン・フランクリンは、アメリカの建国の父の一人と呼ばれている。独立宣言書の起草委員をつとめ、独立戦争後のイギリスとの外交交渉にも全権として従事。アメリカ憲法制定会議にも参加。刻苦勉励して印刷業から身を興し、ピューリタンとしての禁欲と倹約、人間関係を大切にし、一大資産家になる。資産家になるとその資産を慈善事業に惜しみなく使った。科学にも志し、特に黎明期の電気学に興味を持ち、雷雲に向けて凧を揚げ、雷が電気であることを発見したことで有名。避雷針の発明者といわれている。アメリカンドリームを立証した高潔な人物として、現在でもワシントン・リンカーンと並んでアメリカ人に最も尊敬されている偉人の一人である。

⑧学んだこと

フランクリン自伝を読んで、改めてベンジャミン・フランクリンという人のすばらしさがわかった。フランクリンが亡くなってから 200 年以上経つにもかかわらず、愛され続けているのは、彼の偉大さと魅力的な人柄に惹かれる人が多いからであろう。彼は、貧しい家庭に生れ、ほとんど学校教育も受けられなかった。父親や兄との衝突もあったが、早くから働きながら読書に励み、独学

で外国語を習得し、哲学、科学の研究をした。そして、巡回図書館を作り、哲学協会を設立し、ペンシルヴァニア大学の設立を援助し、多くの公共事業に貢献し、有益な発明、発見をし、また有能な政治家としてアメリカの独立に多大の貢献をした。政治家として、科学者として、天才的な活躍をし、一般の人々とは、かけ離れた存在ではあるが、フランクリン自伝には、現代の私たちの日常生活にすぐにでも取り入れることのできる身近な具体的な助言がたくさん盛り込まれている。多くの苦労と努力を重ねてきたフランクリンだからこそ、彼の言葉には説得力があり、学ぶところが多いのだと思った。

⑨summary ;

Wonderful of the person named B. Franklin has been understood renewing the Franklin autobiography reading. It keeps being loved though 200 years or more have passed since the Franklin died because there are a lot of people that withers in his great and attractive character. He was born to the impecunious family, and the academic training was hardly received. It worked hard at reading while working from early time, it mastered a foreign tongue by self-study, and the philosophy and the science were researched though there was a collision of father and the elder brother, too. And, the traveling library was established, American Philosophical Society was established, the Pennsylvania university was helped to establish, it contributed to a lot of public works, a profitable invention and the discovery were done, and the United States did a large independently contribution as an able politician. Talented activity is done as a scientist a lot of concrete familiar advice that can be taken to daily lives of us modern even at once is included in the Franklin autobiography as a politician though general people are quite different people. I thought many persuasive to his word because of the Franklin who did a lot of hardships and efforts repeatedly, and learning.

参考文献

・『フランクリン自伝』　(岩波文庫)　松本慎一、西川正身訳
・『人生を幸せへと導く **13** の習慣』　(総合法令)　ハイブロー武蔵訳
・『アメリカ古典文庫１』　ベンジャミン・フランクリン　(研究社)
・『人物アメリカ史(上)　』(新潮選書)　ロデリック・ナッシュ著　足立康訳
・『フランクリン』　(やまねこ文庫)　板倉聖宣

ベンジャミン・フランクリンの

生涯・格言から学んだこと

喜久田　尚也

①英語タイトル：What I Learned from Franklin's Life and Proverb

②英語名：Takaya Kikuta ③専攻：欧米言語文化講座　英語圏

④　　⑤　　⑥

⑦論文を書くにあたっての関心ごと：独立する前のアメリカにおいて様々な職種を経験したフランクリンの生き方・独立戦争中やその後における彼の貢献・彼の人生を支えた 13 徳

Ⅰ.略歴

・1706 年 1 月 6 日（ユリウス暦）　マサチューセッツ州ボストンで生まれる

・1716 年　　10 歳で学校教育を終える

・1718 年　　『ニュー・イングランド・クーラント』紙を印刷出版していた兄のジェームズの徒弟となった。その後、次第に記者や編集者として頭角を現す

・1724 年　　知事の勧めによりロンドンに行き、植字工として働く。

・1726 年　帰国、印刷業を再開する

・1729 年　『ペンシルバニア・ガゼット』紙を買収。

・1731 年　フィラデルフィアにアメリカ初の公立図書館を設立するこの図書館は成功を収め、これを規範にアメリカの他の都市にも図書館が開設されるようになった

・1748 年　印刷業をたたみ、公職に専念するようになる。ペンシルバニア植民地議員や郵便総局長をつとめた

・1751 年　フィラデルフィア・アカデミー（後のペンシルバニア大学）を創設

・1754 年　勃発したフレンチ・インディアン戦争ではイギリス軍ための軍需品調達に奔走する

・1757 年　植民地の待遇改善を要求するためにイギリスに派遣された。このとき、彼の科学的な業績を称えオックスフォード大学にて名誉学位を授与されている

・1777 年　アメリカ独立宣言の起草委員となり、トマス・ジェファソンらと共に最初に署名した 5 人の政治家のうちの 1 人となった。独立戦争中はパリの社交界を中心に活動し、欧州諸国との外交交渉に奔走。フランスの独立戦争への協力・参戦と、他の諸国の中立を成功させる

・1790 年 4 月 17 日　84 才で死去。葬儀は国葬とされた

Ⅱ.幼少時代～独立戦争までの業績

ベンジャミン・フランクリンはマサチューセッツ州ボストンにて 17 人の兄弟を持つ農家で 15 番目の子として生まれました。その影響からか家は昔から貧乏でした。そんな家庭のことを考慮したのかはわかりませんが、学校に通いだした 8 歳からわずか 2 年の 10 歳までで学校教育を終わらせてしまいました。その間に彼は当時世の中に出回っていた世界の著名な書物のほとんどを読んでしまっていたようです。その後ロウソク職人を経験した後、印刷業にかかわっていくことになります。そこで新聞を発行して評論家としての名を挙げます。さらに格言つきの暦

を発行して出版業者としても成功を収めることとなります。その後は郵便制度の整備・公立図書館の設立・大学の設立など社会的な設備を充実させていきます。科学者としては、雷の発生しやすい日に凧をあげて、稲妻が自然現象であることを突き止めたり、電気の実用化を実現したり、避雷針、遠近両用メガネ、薪ストーブなど現代の我々の生活に欠かせないものを発明していきます。さらにその後フランクリンはフランス語をマスターし駐フランス米国大使に就任しました。そして彼は印刷家・評論家・社会改良家・出版業者・科学者・発明家・外交官・政治家・哲学者の合計 9 つの肩書きを持つ人物になりました。

Ⅲ.独立戦争以降の業績

独立戦争の時期になると彼は政治家として大きな活躍を見せます。駐フランス米国大使の肩書きを生かしてイギリスと戦った独立戦争時にフランスの支持を取り付け援軍の派遣を得ます。結果的にこれが独立戦争の勝利に結びついたといえます。そしてフランクリンはトマス・ジェファソンらとともに独立宣言を起草する 5 人の政治家のうちの一人に選ばれました。そのとき彼は「まさに我々は共に立ち上がらなければならない。さもなければまず確実に個々につるされることになるだろう」という一つの格言を残し、植民地の人たちの結束を促しました。当時は団結をしなければイギリスに負けてしまう、さらに独立もなくなってしまうということを感じていたフランクリンの言葉もあってアメリカは独立することになりました。そして現在は彼の数々の功績が認められていてアメリカの 100 ドル紙幣の肖像画にはフランクリンが描かれています。

Ⅳ.格言

フランクリンは様々な職業を経験し、社会に貢献してきましたが、また同時に多くの格言も残してきました。フランクリンの 13 徳という自らに必要な「徳」を習慣づけるために作ったものは彼の数々の名言の根源となっています。1 年は 52 週でそれを 4 で割って 13 週。1 週間ずつ 1 徳に集中して 4 周できるという計算となりフランクリンはそれを自らの生活において実践してきました。例えば私たちの多くが知っている「時は金なり(Time is money.)」という言葉はもともとフランクリンが考え出した格言です。意味はもちろん「時間はお金と同じように大切な価値がある。無駄にしてはいけない」ですが、これは13徳のうちの第6徳である「勤勉　時間を空費するなかれ。つねに何か益あることに従うべし。無用の行いはすべて断

つべし」に通じています。またフランクリン自伝の中には何度もこの 13 徳にある「勤勉」と「誠実」という言葉が登場してきています。彼が生涯に渡って数々の地位、名誉などを手にしたのは常に成功ばかりではなく失敗や挫折があったものの、この 2 つの言葉が彼を助け、そして彼がそれらを胸に行動してきたからだという見方が出来ます。彼自身は 13 徳を体得出来なかったと自分で評価していることから、彼自身完璧な人間ではなかったといえますが、これほどの実績や功績を残してきた背景には彼の思い描いていた 13 徳は、客観的にみると、限りなく実現できていたのではないかと考えます。

私がベンジャミン・フランクリンに興味を持ったのは彼の数々の格言の素晴らしさに感激したのと、これほどの功績を残してきたフランクリンが日本においてはそんなに知名度が高くなく彼の生涯について知らない人が多いと聞いたからです。

⑧学んだこと：フランクリンは子どものころから積み重ねてきた努力が実を結んだ結果が彼の功績につながっているのだと思います。「継続は力なり」という言葉を現実のものにして大きな成功を収めた彼の人生から、努力は決して全ては報わるとは言えないが辛抱強く努力を続けていたら絶対に報われるということを学びました。また、人生において様々な経験することが大事であることも学びました。私はこれまで一つのことを持続して努力していくことが出来ませんでしたが、続けてきた努力が報われて最後には大成した彼の姿を見てどんな小さなことでも良いので日々の努力を続けていくことを決心することが出来ました。

⑨英語サマリー：Benjamin Franklin was born in a poor family. However he made much effort again and again. And he experienced many jobs and made a great work in Independence War as a politician. I learned that continuing efforts will make us happy and to have many experiences is so difficult for life.

米文学から見る教師像

上鶴　智子

① 英語タイトル： A Teacher Image Learned From American Literature ② 英語名： Tomoko Kamizuru ③ 所属：欧米言語文化講座　独語圏 ④
⑤ ⑥
⑦ 論文を書くにあたっての関心事：歴史・教育制度・教師に必要なもの・子どもとの接し方

「米文学史」の授業でワシントン・アーヴィング（1783－1859）の『スケッチ・ブック』に収められた短篇の一つ「スリーピー・ホロウの伝説」のビデオを見て，教師が軽んじられている点に疑問を抱くと同時に，今の日本と同じではないかとも感じた。現在の日本でも教育のあり方については大きな課題となっており，様々な取り組みもなされている。私自身，教員を目指していることもあり，当時の社会背景や教育事情なども含めて，「スリーピー・ホロウの伝説」をもう一度見直し，教師が軽んじられている理由を探し，教師のあり方を考えていきたいと思った。

Ⅰ.「スリーピー・ホロウの伝説」

↑ *The Legend of Sleepy Hollow*の絵本（左）とビデオ（右）

独立戦争後のアメリカ。ハドソン河からさほど遠くないところに小さく静かな渓谷があった。眠気をさそう夢のような力がこのあたりをおおっているため，このさびしい谷は長いあいだスリーピー・ホロウ（まどろみの窪）という名で知られていた。ここには伝説は豊富で，幽霊の出る場所も多かった。

そこへある日，イカボット・クレインという男が教師としてやってきた。彼は生活費を補うために，あちこちの百姓の家に下宿し，食事の厄介になっており，そしてその子どもたちを教えていたのだった。さらに彼は，先生は単なる穀つぶしだと思われないように，い

ろいろと用事をしたり，好かれるようにしたりもした。女性たちには大もてだったが，彼は裕福な農夫の娘，カトリーナ・ヴァン・タッセルの愛情を勝ち得たいと願った。ところが彼にはライバルがたくさんいた。そのうちの一人，ブロム・ヴァン・ブラントという男は大した男でイカボットにとっては強敵だった。

そんなある日，タッセル家でパーティーが開かれた。そこへはイカボット，ブロムをはじめ大勢の者が招待された。イカボットはパーティーの最中，年寄りの物識り連中が集まって話をしている中へ入っていった。そこでは，独立戦争中の話やスリーピー・ホロウの幽霊話が出た。しかし，さまざまな物語のうちでいちばん主だったものは「スリーピー・ホロウの首なし騎士」の幽霊話であった。そうしているうちにパーティーは無事に終わり，イカボットは夜遅く一人で家へと向かっていた。その道中，彼は「首なし騎士」に出会ってしまった。その日以来，スリーピー・ホロウでイカボットの姿を見た者はいないのだった。

Ⅱ．アメリカの教育事情

アメリカの義務教育制度は植民地時代からあった。マサチューセッツ植民地で１６４２年，１６４７年に世界で最初の義務教育に関する法令が制定された。とはいえ，教員資格については特別な規定はされていなかった。１６５４年になって初めて教員資格に関する明白な規定がなされたのだが，教員の資格として最も重要とされたのは健全な教義であった。では，マサチューセッツ植民地において教員の資格が免許状の発行を伴う資格となるのはというと，18 世紀になってからである。

一方，バージニアなどを中心とする南部植民地やニューヨークなどの中部植民地においては少々事情が異なる。例えば，１６３７年，当時オランダの植民地であったニューヨーク植民地ではオランダ改革教会によって資格を吟味され，免許状を与えられた者，つまり最初の教員が存在していた。そして彼には学校教員の役割だけではなく，読経者，説教者としての職務を遂行することが求められていた。その後ニューヨーク植民地はイギリスの植民地となったが，英国国教会の支配下における教員免許資格においては，マサチューセッツ植民地と異なり，当該植民地総督の免許状，あるいはロンドン大司教の免許状が必要とされていた。

以上のように，植民地時代においては，教員資格に対して宗教的性格が浸透していた。１９世紀になると，教会の勢力は排斥されるようになり，教員に対する免許権や雇用権は市民の代表の手に渡るようになってきた。法的にはタウンの学級委員によって資格を有すると認められた者のなかから学区学務委員会が雇用を決定しなければならないのであるが，実態はその逆であり，免許状が発行される前に既に雇用が確定しており，教員免許の試験も口答試験での形式的なものであった地域が少なくなかった。

Ⅲ．アーヴィングと教育界

ワシントン・アーヴィング（Washington Irving）は１７８３年４月３日，マンハッタンに生まれた。短篇小説作家としてよく知られているアーヴィングは短篇小説だけでなく，エッセイや伝記，その他様々なジャンルの作品においても多作な作家であった。彼はまた法律家でもあり，アメリカの対イギリス・スペイン外交官のメンバーであった。

１９世紀前半のアメリカでは，公立学校運動が始まり，就学人口の増加に教員数が追いつかない状況となった。そのため，いかに安価に教員を雇用できるかが関心事であった。１８１５年，アーヴィングはヨーロッパへ旅に出かけた。『スケッチ・ブック』はその旅の最中，１８１９年～１８２０年に刊行された。

Ⅳ．イカボット・クレインにみる教師像

以上，Ⅰ～Ⅲで見てきたことから，イカボット・クレインにみる作者の教師像を見ていきたいと思う。

「スリーピー・ホロウの伝説」の中で，イカボット・クレインに関してアーヴィングは次のように描いている。

恍惚となったイカバットは，こんなことを空想しながら，緑色の大きな眼をぐるぐるさせて，ゆたかな牧草地をながめ，豊穣な小麦や，ライ麦や，蕎麦や，玉蜀黍の畑を見わたし，赤い実が枝もたわわになっている果樹園を見，それにかこまれたヴァン・タッセルの暖かい家を見ていた。すると，彼の心は，やがてこの領地をうけつぐことになっている乙女に恋い憧れた。彼の想像はさらにひろがって，こういうものを即座に厳禁にかえて，その金を広大な未開地に投資して，荒野のなかに板ぶき屋根の宮殿をつくることもできよう，などと考えた。（吉田甲子太郎訳『スケッチ・ブック』新潮社，207, 208 ページより引用）

他にもイカボットは女性に対してもろく，甘いとも描かれている。

女性と金銭にもろく，最後は幽霊を恐れて逃げ回る，という姿から教師への尊敬などといったものは受け取れるだろうか。なぜアーヴィングはイカボットをこのような「教師」にしたのか。私はその理由として，アメリカの教育事情が関わっているのではないかと感じた。教員になるための資格も採用もいい加減だったため，教職についている者全てが教師としての誇りを持っていたとも限らないし，人々の間には全体像として教師を軽視する傾向が少なからずあったのではないだろうか。「スリーピー・ホロウ」の中で，イカボットは牧師に次いで学問に通じている，とある。その結果，女性たちにちやほやはされていたが，尊敬の念というものは薄かったのではないか。人々に親切にしてはいても，それには生活費補助のためなどの裏があった。こういったイカボットの姿は今の日本の一部の教師にも見受けられるように思う。結果，教師に対するイメージはどうだろうか。教師への不信感を露にしている人は少なくない。私は，教師にとって不可欠なものとは，知識や表向きだけの指導だけではなく，その人間性であるのだと改めて感じた。

⑧　学んだこと，得たもの：イカボットの姿から，知識だけでなく，自己の人間性を充実させることの大切さを学んだ。そしてそれは教師だけに必要なものでは決してなく，社会の中で人間関係を形成していく上でも重要なものであるとも思う。

⑨　英語サマリー：I learned the importance of enrichment of not only the knowledge but also human nature from the figure of Ichabod. I also think that it is necessary to build well human relationship in a society as well as to be a teacher.

参考文献

W.アーヴィング著『スケッチ・ブック』吉田甲子太郎訳，新潮文庫，2000年

八尾坂修著『アメリカ合衆国教員免許制度の研究』風間書房，1998年

参考ホームページ

The Project Gutenberg EBook of *The Legend of Sleepy Hollow*

http://www.gutenberg.org/dirs/etext92/sleep11h.htm#title

エドガー・アラン・ポー

～推理小説と文学的特徴～

槇野　健太

①英語タイトル: Edger Allan Poe: His Detective Story and the literature feather ②Kenta Makino ③ 所属: 欧米言語文化講座　英語圏 ④　⑤
⑥　⑦論文を書くにあたっての関心事: 推理小説の始祖とも言われ、長い間万人に親しまれているエドガー・アラン・ポーの作品とそこに秘められている彼の作品の特徴

Ⅰ.エドガー・アラン・ポー(Edger Allan Poe, 1809-49)について

まずみなさんの先入観では、エドガー・アラン・ポーという文学作家はある一介のホラー小説家、推理小説家でしかないように思われる。確かに、私自身としても「アッシャー家の崩壊」という中世の拷問などが登場したホラー作品を観たためにその印象しかなかった。しかし、いざエドガー・アラン・ポーの作品世界に足を踏み入れてみると、ホラー小説のみならず推理小説、SF 小説など後世のさまざまな文学作品に影響を与え、講義でも取り上げられたハーマン・メルビル著「白鯨」にも多大な影響を与えており、特に探偵小説の分野にいたっては「推理小説の父」と現代でも語られているほどの文豪である。日本でも、その影響は多大であり、日本の有名推理小説家である江戸川乱歩もその名をエドガー・アラン・ポーからもじるほど影響が強かったと思われる。また、シャーロック・ホームズやコロンボ刑事など今でも万人に好かれている名探偵たちの祖先でもあるオーギュスト・デルパンを誕生させたのもエドガー・アラン・ポーである。

ここでは、私が最も興味のある推理小説の分野に焦点を当ててエドガー・アラン・ポーの作品を分析していきたい。

Ⅱ.エドガー・アラン・ポーの推理小説

私は数あるエドガー・アラン・ポーの作品から 3 つの代表作を挙げていきたい。

①「モルグ街の殺人(The Murders in the Rue Morgue)」

この作品は、エドガー・アラン・ポーの初めての推理小説であり、のちにシャーロック・ホームズにつながるオーギュスト・デュパンの誕生となる作品でもある。また、この作品こそ、古典純準本格の傑作であり、世界で初めて、純本格推理をあつかった小説でもある。犯罪物語は、古くから語られてきましたが、これほど分析的知性に訴える、推理の醍醐味を凝縮した作品だと言われている。

事件に立ち会わせる前に、まず、その資格のある人物であること、すなわち名探偵であることを、演繹帰納推理によって証明するために、デュパンは、語り手が何を考えていたか、的確な観察とあざやかな推理によって、暴露してみせる。そうやって語り手を驚嘆させるわけなのだが、同時に、デュパンの存在感、名探偵の実存性が、読者の胸に、はっきりときざまれるのです。作品自体も、17 世紀パリ、モルグ街で起こった殺人事件で、それはきわめて異常な現場でした。デュパンは、現場をつぶさに観察し、論理的な省察をくわえ、一歩一歩と帰納演繹推理を駆使し、しかも、たどり着いた真相は、驚嘆すべきものでした。

読者からすれば、目の覚めるような、わくわくする物語でありますが、一方、作家の側からすれば、これほど難しい小説構成もないように思える。

凡庸な観察で、凡庸な推理をならべ、誰でも思いつきそうな結論にたどり着いたのでは、推理にリアリティ、推進力、実証性が出ない。えてして陥りがちなのは、大まかな状況、漠然とした手がかり、意外な結論だけ、あらかじめ決めておき、そのあいだに来るべき推理を飛躍した無理な説明で穴埋めする、というやり方では“完全”な探偵小説にはなりえない。「モルグ街の殺人」では、思いもよらなかった真相が指し示されることによって意外性を生み出している。

この作品で私は、彼がとても心の中でどれほど苦悩したかうかがえた。単純な推理ではだめだしましてや読者に先を読まれるようなものはなおさらだろう。その中で、この作品を残した彼から表現の難しさとあえてそれにチャレンジする精神を学んだ。

②「マリー・ロジェの謎(the Mystery of Marie Roget)」

この物語も、オーギュスト・デュパンが名探偵とした作品であり、ニューヨークで実際に起こった、メアリー・ロジャース殺人事件を下敷きに、舞台をパリに置き換えて、再構成したものである。物語そのものはフィクションであるが、作者が冒頭で断っているように、作品の目的はあくまでも真実の追求、真相解明だ。そのため本心的な要素、重要な手がかりは細部にいたるまで事実そのままである、とエドガー・アラン・ポーは念を押している。

「モルグ街の殺人」の解決で名をあげたデュパンが、警察からの協力を要請されるところから、物語は、はじまる。香水店の売り子をしていたマリーが、セーヌ川で遺体となって発見されたためだ。警察は犯人を特定できず、捜査は暗礁にのりあげ、新聞もあれこれ憶測をならべるが、決め手にはならなかった。しかし、デュパンは、それらのことをあっ

さり見抜いた。また、マスコミの記事が、真実を追求にあるものでなく、センセーションをまきおこし、特定の主張を大衆に信じ込ませるためにあると作品を通して主張している。エドガー・アラン・ポー自身、マスコミで雑誌編集者として働き、刺激的な書評、作品、記事を書いて、読者を扇動するのを得意としていたから、非常に説得力がある。

さらにこの作品では、新聞の記事の憶測が、以下に浅薄で、根拠にとぼしいか、ひとつひとつ論破していました。この部分が、この作品最大の見所かもしれない。新聞が単に間違っていると批判するのではなく、記者が、別の目的のために筆をふるっているところまで、見抜き論破していくといった文で構成されている。そして、細かな観察がデータとなっているが、ポーは作中、ニューヨークの現場に行ったことがない、と断っている。ということは新聞記者のみを作中の推理をデータとし、エドガー・アラン・ポー自身が安楽椅子探偵をやってみせたのだ。作品で行き着いた結論はあくまでフィクションであるため実際にある事件をエドガー・アラン・ポーが推理して解決しているといった錯覚めいたものに陥る作品であった。

この作品では、さまざまな新聞の論破している姿が彼の中で疑問に点を明らかにし、それを追及し、読者に公表することで、自分の疑問に思っている点はさまざまな証拠から残らず明らかにするアクティブさがこの作品を通して伝わった。

③「盗まれた手紙(the Purloined Letter)」

この作品こそ、エドガー・アラン・ポーの探偵小説の中でも、傑作とうたわれる名編である。ストーリーの簡潔さ、明晰さ、意外性、そしてユーモア。のちの推理小説家に与えた影響の大きさは、計りしれない。

時は19世紀、舞台はパリ。素人探偵デュパンの書庫兼書斎へ、警察総監が、話にやってきたところから、はじまる。手紙が、誰に盗まれたのかは、わかっている。問題は、手紙が、どこに隠されているのか、という点。その人物の部屋か。外か。どこへやったのか。この単純な問題に、デュパンが挑んだ。話を聞いただけで、ユニークな推理方法をもちいて、見事に解決してみせる。

この作品は、一度読んだだけでは、その真価を理解できないだろう。この作品は何度も読んでこそこの作品の魅力やユニークさが伝わってくるのではないだろうか。そして、興味をそそる物語が、たったふたつのシーンから成っている点に、注目して、この作品は簡潔なプロットこそ、純本格探偵小説の要点なのだと想起させるような作品でもある。

謎は、いたって単純なものだ。どこに手紙を隠したのか。密室殺人も、ダイイング・メッセージも、身元不明の死体も、出てこない。純本格探偵小説は、単純な謎で、いっこうに、かまわない。問題は、謎を、どのように解くか。その解決が、どれほど新鮮で、納得ゆくものであるか。そこが大切なのだと思われる。

この作品で私は、表現の中でいかに物語をシンプルにしるしていくかが重要かというこ

とを学んだ。また、表現の難しさとともにひとつの事柄でもどのように提供していくのかどのようにしたら面白みが出せるのかがこの作品を通して伝わった。このように読者の視点でさまざまな表現をしているようにも思えた。

Ⅲ.イメージ一新

これらの 3 つの作品を通して思ったのは、エドガー・アラン・ポーはどの推理小説の中でも読者に対してシンプルかつ明快に読めるという印象を受けた。また、さまざまなジャンルの小説を活かし、全体的にダークサイドナ面を持ちつつ、ユニークな面も持ち合わせているように作品を読んでいくほどに思えた。そのため、読者に対してハラハラ感やわくわく感を持たせているように思え、それがまさに推理小説の真髄だろう。確かに、エドガー・アラン・ポーという偉大な小説家が一介のホラー作家、推理小説家ではなく、さまざまなジャンルに通じて万人に愛され、文学の世界で一時代を築き、それが現代の小説につながるような小説の始祖のようなものであるというように思い、今までの私のエドガー・アラン・ポーのイメージが崩された気がした。

⑧学んだこと、得たもの: あまり知られることのなかった推理小説にチャレンジする精神、ひとつの決まった表現に満足せずに多くの作品にさまざまな表現を使い、読者に対して知的かつ面白みを与えるために尽力するストイックさと向上心をポーの作品から学んだ。

⑨SUMMARY: I learned the fighting spirit that Poe challenge detective stories which was not be known very much, the stoic, and the spirit of improving that he had not never been satisfied one expression, he tried to use many expressions in his pieces to give readers intelligence and interesting.

参考文献

Wikipedia:
http://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%82%A8%E3%83%89%E3%82%AC%E3%83%BC%E3%83%BB%E3%82%A2%E3%83%A9%E3%83%B3%E3%83%BB%E3%83%9D%E3%83%BC
モルグ街の殺人事件(エドガー・アラン・ポー/佐々木直次郎訳/新潮社出版/1951 年出版)
マリー・ロジェの謎(エドガー・アラン・ポー/佐々木直次郎訳/新潮社出版)
盗まれた手紙(エドガー・アラン・ポー/佐々木直次郎訳/新潮社出版)

エドガー・アラン・ポー
～大作家の生涯～

加納 将貴

① 英語タイトル：Edgar Allan Poe ~the Life of A Great Writer~
② 英語名：Masataka Kano　③ 所属：欧米言語文化講座　英語圏
④　⑤　⑥
⑦ 論文を書くにあたっての関心事：ポーの生涯、作品の特徴

Ⅰ．始めに

エドガー・アラン・ポー(Edgar Allan Poe, １８０９～１８４９)は世界でも有名なアメリカの作家である。私たちの住む日本でも、明治の１０年ごろに紹介されて以来、多くの人々が彼の作品に惹かれ、影響を受けてきた。その一人として有名なのが推理作家の江戸川乱歩(１８９４～１９６５)である。彼の名前はエドガー・アラン・ポーをもじったものである。ポーは時代背景と無関係の作家と思われることが多いが、彼の作品の中には当時の社会から影響を受けた作品もある。そんなポーの生涯、作品について探っていこうと思う。そしてその過程で、彼の生き方、作品から、自分が今を生きる上で役立つことを１つでも見つけてみたいと思う。

Ⅱ．ポーの生涯

ポーは舞台俳優の子としてボストンで生まれた。ポーは幼い時に両親をなくし、リッチモンドの子どものいない裕福なアラン夫妻の養子となった。しかし

義父との間に亀裂が生じ、ポーはアラン家を出ることになる。ポーはボストンに戻り、エドガー・A・ペリーの名で合衆国陸軍に入隊した。上級曹長にまで昇級したが、自ら除隊した。その後ポーは本格的な作家活動に入っていく。リッチモンドの雑誌「南方文学新報」“the Southern Literary Messenger”の編集者となり収入を得た。この頃、２７歳のポーは周囲の猛反対を押し切って、まだ１３歳だったいとこのヴァージニアと結婚した。そしてニューヨークに移った後フィラデルフィアに移転。当時の社会は文筆で生計を立てることは難しく決して豊かな生活ではなかったが、彼の作家としての人生は充実していた。ポーは１８４０年に記念すべき最初の短編集『グロテスクとアラベスクの物語』を出版した。しかしそんな中、４２年にヴァージニアに肺結核の兆候が現れ、精神的な打撃を受け、金欠などの悩みも重なりポーは健康を害していく。ヴァージニアは亡くなり、その２年後、ポー自身もボルティモアの路上で重篤状態で発見され、ワシントン大学病院へ搬送されたが、亡くなった。

ここで着目したいのは１８４０年ごろである。作家としての充実を手にして間もなく、妻に病が襲い掛かった。私はこのことから人生の無常さを感じずにはいられなかった。確かに人生は良いこともあれば悪いこともあるだろう。それの繰り返しが人生なのだと思うが、作家としてこれからという時に、ポーを襲った悲劇は、私が想像する以上にポーにとって残酷だっただろう。

Ⅲ．時代・社会と作品の背景

ポーを語る上で外せないのが短篇小説である。ポーの短篇は多様性に富んでいる。それは大きく４つに分類できる。

１つ目は、「アッシャー家の崩壊」“The Fall of the House of Usher”に代表されるような奇怪な超自然を題材とするものである。日常に潜む不可解な世界の存在を描くことによって、人間存在の不安・不可思議、運命、死の恐怖に対して読者の感覚を研ぎ澄まさせた。

2つ目は、「軽気球夢譚」“The Baloon-Hoax”に代表されるようなパロディやホークスなどのこっけいな物語である。大げさなジェスチャーや言葉遊び、あるいは不条理なストーリーが展開される。またポーの豊かな想像力は当時めざましい発展を遂げつつあった科学と結びつき、ミイラと話したり、サイボーグをつくり上げたりなどのサイエンスフィクションのようなものも生み出した。

3つ目は、架空の人物で世界初の名探偵といわれるC・オーギュスト・デュパン（*C. Auguste Dupin*）が登場する「モルグ街の殺人」“The Murders in the Rue Morgue”に代表されるような推理小説である。これによってポーは推理・探偵小説の祖といわれている。数は多くはないが現代推理小説の代表的なタイプの原型を作ったといえる。

4つ目は、「ウィサヒコンの朝」“Morning on the Wissahiccon” に代表されるような風景を主題とするものである。この作品の中でポーは以下のように述べている。

「アメリカのどの地方でも、一番美しい景色を見たいと思うならば、鉄道や汽船や駅馬車はもちろん、自家用の馬車も、馬すらもあきらめて、自分の足で歩かなければならぬ。」

このようなことから急速に進む産業化による自然破壊に対するポーの批判の気持ちが受け取れる。アメリカは独立戦争(１７７５～１７８３)後どんどん力を増していき、19世紀にはルイジアナ買収、メキシコとの米墨戦争(１８４６～１８４８)などの諸外国との戦争、アメリカ国内での内戦である南北戦争(１８６１～１８６５)などを経ていくことになる。このころ大陸横断鉄道の建設など産業、科学技術も同時に発展していくこととなる。このような変遷の１９世紀の中で、ポーの作品のいくつかは社会を映し出していたと言える。当時の社会に敏感で、かつ自分の世界を作り上げたポーの作品だからこそ時代を越え多くの人々を魅了しているのだと感じた。

Ⅳ．最後に

上で述べた通りにポーの作品の中には社会背景とリンクしているものもある。その作品の中で自然破壊を批判するなどして、自然に対する愛情を示したのだ

と思う。自然だけではなくポーは最愛の妻であるヴァージニアに対しても大きな愛情を持っていたのであろう。ポーの書いた最後の詩「アナベル・リー」*"Annabel Lee"*はヴァージニアに対する痛切な想いから書かれたものであった。以下がその一部分である。

But our love it was stronger by far than the love
Of those who were older than we
Of many far wiser than we
And neither the angels in Heaven above
Nor the demons down under the sea
Can ever dissever my soul from the soul
Of the beautiful Annabel Lee

愛情というものは私たちにとってかけがえのないものだ。人に対する愛情だけではなく、ポーは自然破壊に対する危惧を抱き、自然に対する愛情も忘れなかった。私はポーの生涯や作品について学ぶと同時に、時代が変わっても、変わらない愛情の存在も再認識した。このように、ポーについて探っていく中で、単に文学者について、その作品についてだけではなく、他にも大事なことを学ぶことがあるのだと知った。自分が直接学ぼうとしたこと以外でも、私たちはいくつかのことを学べるのだと。このポーについての考察を通して、これから自分がいろんなことに挑戦する中で、広い視野、広い視野を持って取り組むことによって、より多くを学び吸収できると感じた。これから先、たくさんのものを見て多くを学んでいきたいと思う。

⑧ 学んだこと：ひとつの分野を学ぼうとする中でも、違う分野での発見もあるということ。広い視野を持って多くを学んでいくことが重要だということ。
⑨ 英語サマリー：When we learn or do something ,it is important that we should have a wide view and learn more.

参考文献

『E.A.ポーの短編を読む【多面性の文学】』　板橋好枝　野口啓子　(勁草書房)
HP　http://pinkchiffon.web.infoseek.co.jp/book-AnnabelLee.htm

エイブラハム・リンカーン

～努力し、成功し、愛されたアメリカンドリーム～

井上　繭加

執筆者データ：①英語タイトル：Abraham Lincoln：Ideal American　②英語名：Mayuka Inoue
③所属：欧米言語文化講座　英語圏　④　　⑤　　⑥
⑦論文を書くにあたっての関心事：リンカーン　南北戦争　国際交流　教育問題　公民権運動

Ⅰ.はじめに

リンカーン(1809-65)と言えば、「奴隷解放宣言」、「ゲティスバーグの演説」などで有名なアメリカ合衆国の第 16 代大統領である。彼は政治家としてさまざまな演説を行ったが、彼の言葉は多くの人々の心を動かし、社会に影響を与えた。ここでは彼の残した言葉を文学と捉えて、そこから得られるものについて考えていこうと思う。

彼は国民にもっとも愛され、尊敬された大統領であると言われているが、なぜそのように言われているのか、実際にはどのような人物であったのか探っていきたいと思う。そして、自分のためになることをその過程で見つけていきたい。

Ⅱ.生い立ち

リンカーン(Abraham Lincoln)は 1809 年、ケンタッキー州の貧しい農家に生まれた。両親の農作業を手伝いながら学校に通い、熱心に勉強した。そして、雑貨屋、郵便局員、測量士、弁護士など、たくさんの仕事を経験した。

1834 年、イリノイ州の選挙に立候補し、議員となる。しかし、議員になったものの収入は多くはなかったため、彼は弁護士になった。そこでも、彼は多くの人を助け、多くの人の信頼を得た。また、その頃から奴隷制度について反対する演説を各地で行った。その演説が素晴らしかったため、共和党から大統領に立候補するよう薦められ、1860 年、ついに第 16 代大統領に当選した。

このように、彼が大統領という立派な地位に到達することができたのは、貧しさに負けることなく努力し、いろいろな経験を積んだ結果だと思う。努力の大切さを改めて感じた。

Ⅲ. 南北戦争

奴隷制度に反対していたリンカーンの大統領就任を南部諸州は容認せず、次々と連邦からの離脱を行う。連邦の分裂と分断を防ぐため、リンカーンは強硬な態度に出た。これが南北戦争へとつながる。南北戦争は彼のフラストレーションの源であり、任期のほぼすべてを占めた。リンカーンは正規の軍事教育を受けたことがなく、指揮官クラスで戦争に参加した経験もなかった。しかし彼は持ち前の人格と知性を駆使し、偉大な軍事指導者として後に賞賛されることになる。ジョージ・マクレラン将軍を始めとする総指揮官達が繰り返した一連の失敗によるフラストレーションの後に、リンカーンは、急進的で有能な軍指揮官ユリシーズ・S・グラント将軍を任命する運命的な決定を下した。グラントは軍事知識とリーダーシップを発揮した。

リンカーンはここで、洗練された人格、信頼を持つ指導者としての非凡なる才能を開花させ、みんなに慕われる存在であったことが分かる。

Ⅳ. 奴隷解放宣言

リンカーンは奴隷解放宣言によって黒人奴隷を解放したことで賞賛される。しかし、実際には連邦軍によって制圧された南部連合支配地域の奴隷が解放されただけであって、奴隷制が認められていた北部領域では奴隷の解放は行われなかった。リンカーンは、戦争の発生だけが大統領に合衆国内に既に存在する奴隷を解放する憲法上の力を与えたと主張して戦時立法として宣言に署名した。反乱州における奴隷制度を廃止した宣言は公式な戦争の終結となり、それは奴隷制の廃止と連邦での市民権の確立に関するアメリカ合衆国憲法第13条および14条の修正条項制定の推進力となった。政治上奴隷解放宣言は北部に対して大きな支援となった。南部の綿花の主な購入先であり、北軍の海上封鎖を打破しうる海軍力をもっていたのはイギリスだったが、イギリス世論は奴隷廃止を支持。イギリスが南部を支持することはなかった。

この宣言は、実際にすべての奴隷が解放されたわけではないにしても、歴史的に非常に意味のあるものであったと思う。

Ⅴ. ゲティスバーグの演説

1863 年、アメリカ南北戦争最大の激戦地ゲティスバーグで、リンカーンは戦没者墓地奉献式典の中で短い演説を行った。これが「ゲティスバーグの演説」である。

この演説の一節にある「人民の、人民による、人民のための政治」という言葉はとても有名である。これはその後民主主義の本質を簡潔に示す名文句とされる。原語の“government of the people, by the people, for the people”は「人民から構成する、人民による、人民のための政治」という意味である。これは、1380 年にイギリスで出版された旧約聖書にジョン・ウィクリフが序文として書き込んだ文章であり、牧師のセオドア・パーカーが著書で紹介したのを引用したものと思われる。なお、演説自体は3分程度と非常に短く、当時の新聞の評価はいずれも厳しいものであったが、翌年大統領選挙が行われ、リンカーンは再選を果たしている。

短いが説得力のある演説である。自由と平等という民主主義の意味を考えさせられた。

〔1863年、11月19日のゲティスバーグ演説〕

87年前、我々の父祖たちは自由は保障されなければならない、すべての人は平等につくられているという信条を持って新しい国家を築き上げた。今、我々な大きな内戦の渦中に立たされており、父祖たちが築き上げたこの国の自由と平等の精神、信条がこれから永遠に後生に伝えていけるかが試されている。父祖たちの自由を勝ち取るために戦った戦場に、今我々一同は会している。この国の存続の為に命を捧げた人々の安息の地であるこの場所で自らを捧げるべく、我々は今ここに集まった。我々がやらなければいけない行動は、紛れもなく適切で正しい行動だ。しかし、広い意味で考えると、私たちがこの土地に自分を捧げることはできないだろう。ましてや、この土地を神聖なものとすることもできない。戦争で奮闘した勇敢な戦士たちこそが、その生死に関わらずその身をこの地に捧げたことによって、この地は神聖なものとされたのだ。彼らに対して、非力な私たちがこの土地をどうこうしようなどとはお門違いなのである。我々がここで何をどれだけ言っても、世界は父祖たちの勇敢な行動に見向きもしないかもしれない、またいずれは忘れてしまうかもしれないだろう。しかし、我々は勇敢な戦士たちの行動を絶対に忘れることはできない。むしろ、これまで勇敢な戦士たちが気高き心で推し進めてきた未完の仕事を成し遂げるために自らを捧げなければならない。 むしろ、我々の目の前に残された大きな宿題に身を捧げなければならない。彼等が最後まで身を捧げた大義の為に、彼等の死を無駄にはしない為に、名誉ある戦死者たちが最後まで全身全霊に身を捧げた大義のために、私たちも一層の献身をもってあたらなければならない。これらの勇敢な父祖たちの死を無駄にしないために、神のもとで新しい自由を生み出し、そして、人民の人民による人民のための政治・統治がこの地上から失われてしまわないよう高らかに決意しなければならない。

VI.最後に

以上のように、南北戦争、奴隷解放宣言、ゲティスバーグ演説などでリンカーンはとても大きな役割を果たし、歴史を動かした偉大な大統領であったことがわかる。

アメリカでは、すべての人が家柄や身分に関わりなく、努力次第でいかなる成功をも達成し、豊かになれる「アメリカン・ドリーム」という言葉がある。「丸太小屋からホワイトハウスへ」というのが、リンカーンのキャッチフレーズであったが、実際に丸太小屋で生まれ、十分な学校教育を受けることができなかった少年が、努力を重ね、ついには大統領の地位までのぼりつめ、「アメリカン・ドリーム」を実現させたというのは、リンカーンはアメリカ人にとっての希望である。そしてまた、演説からリンカーンは何よりも民衆を愛し、民衆を大切にする政治家であったことがわかる。

このような理由から、リンカーンは今でもアメリカ国民に愛され続けているのだろう。

私は、彼の人生から学んだたくさんのことを、自分の人生に活かしていきたい。

⑧学んだこと、得たもの：リンカーンは貧しい家庭に生まれながらも努力して大統領となり、奴隷解放などに携わりアメリカの歴史を大きく変えた偉大な人物の一人だ。今でも多くの人々に尊敬されているのは、彼の生き方や、人柄ゆえであると思う。彼は、努力をすれば誰にでも成功するチャンスがあるということを証明したと思う。

⑨英語サマリー：Lincoln was born a poor farmer's son. However, he became a president of the United States because he made efforts. And he is one of the greatest persons that changed American history. Even now, many people respect him for his way of life and personality. I think that he showed that everyone could make a success in life if he exerts oneself to realize one's dream.

参考文献

『リンカーン』　砂田 弘　著　(講談社 1989)

参考 HP

http://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%82%A8%E3%82%A4%E3%83%96%E3%83%A9%E3%83%8F%E3%83%A0%E3%83%BB%E3%83%AA%E3%83%B3%E3%82%AB%E3%83%BC%E3%83%B3

http://ja.wikiquote.org/wiki/%E3%82%A8%E3%82%A4%E3%83%96%E3%83%A9%E3%83%8F%E3%83%A0%E3%83%BB%E3%83%AA%E3%83%B3%E3%82%AB%E3%83%BC%E3%83%B3

『森の生活』とアーミッシュの暮らしから学ぶもの

橋本　加奈子

執筆者データ：①見出し：Learning from the Life of the Amish ②英語名：Kanako Hashimoto ③所属：欧米言語文化講座　独語圏 ④　　⑤
⑥　　⑦関心ごと：電気も水道もない生活がどのようなものか,Henry David Thoreau は森での生活に何を求めたのか,アメリカとドイツのつながり

Ⅰ．Henry David Thoreau が目指した生活

ヘンリー・デイヴィッド・ソロー（Henry David Thoreau,1817-1862）は、アメリカ合衆国マサチューセッツ州コンコード市生まれの作家・思想家・詩人・博物学者である。ソローはコンコード市のウォルデン湖の森の中に自ら小屋を建て、1845 年から 2年2ヶ月にわたり自給自足の生活を送った。その記録が『森の生活』(*Walden*, 1854) で語られている。森に住んだ目的として、「私が森へ行ったのは、思慮深く生き、人生の本質的な事実のみに直面し、人生が教えてくれるものを自分が学び取れるかどうか確かめてみたかったから･･･」と語っている。また、「原始的な辺境生活を送ってみると、最低限の生活必需品とはなんであり、それを手に入れるにはどうしたらよいかがわかる」と書かれており、生活必需品とはつまり「食物」である。衣･食･住が揃えば生活は出来るが、近頃ではそれらに贅沢さを求めるようになってしまった。ソローは「われわれが簡素に、また賢明に暮らす気になれば、この地上で自分の身を養っていくことは苦痛であるどころか気晴らしにすぎない･･･」と語っており、この簡素で倹約な生活がまさにアーミッシュの暮らしであり、現在ロハスという生活スタイルが流行している中、ずっと以前に実行したのがソローであった。

唯一の交通手段である馬車　　シンプルな衣服

興味を持った理由：ソローの『森の生活』がアーミッシュの暮らしであり、それはドイツに関連していると聞き興味を持った。調べていると、ペンシルバニア州東部の町ランカスターを中心とする田園地帯の呼び名で、１７世紀に、宗教迫害を逃れてきたドイツ系開拓移民が住みついた土地であるダッチ・カントリーでは「ダッチ」は、「オランダ」を意味するのではなく、ドイツ語を母国語とする人々だと分かった。また普段私たちが何気なく使っている「電気や水道のない生活」に彼らは様々な工夫をしていることを知り、キャンプを趣味としている私はとても興味を持ったからである。

Ⅱ．アーミッシュとは？

17 世紀の終わりにヨーロッパから宗教迫害を逃れてやってきたアーミッシュの祖先が最初に開拓して住み着いたのがペンシルベニアである。彼らはキリスト教徒であり、その中でもアーミッシュ派・メノナイト派・ブレスレン派・ダンカー派などの人たちは特に「質素な人々」“Plain　People”と呼ばれていた。彼らの生活には、電気もガスも水道もなく、ラジオもテレビも自動車もない。そのように便利なものを拒否するためには家族やコミュニティの結束が不可欠になる。家族は常に一緒にいて、一緒に働き、一緒に食事をしている。時代の移り変わりと共にアーミッシュ派の中には、自動車の所有を許すなど、近代文明の利器を取り入れながら、やや寛大な戒律に従った生活を送るグループも出てきているが、自らの意志と所属する社会の意志とを調整してからでなければ新しいものをそのまま取り入れることはない。

アーミッシュの家庭では、性別により仕事の分担がはっきりと決まっている。夫であり父親である男性は、社会と関係することについての決定権を持ち、農場経営の役割分担を決め、農場や納屋での仕事の指導をする。女性は結婚すると、ふつう 8～10 人くらいの子どもを生み育てる。彼女たちは、菜園の手入れ・食事の準備・子どもの世話・掃除・洗濯・縫いものなどを日々の仕事としている。子どもたちの学校教育は 8 年間だけとし、いわゆる「読み・書き・そろばん」という基本的なことだけを教えている。16～18 歳になると洗礼を受けることが多い。洗礼はアーミッシュの社会では大きな意味を持っており、結婚への絶対必要条件である。

このような姿は昔の日本を見ているように思える。男は外で働き、女は家事をする。アーミッシュの社会において、これは男尊女卑ではなく、それぞれの仕事を誇りにして生きている。また子どもたちは決まった枠の中で縛り付けられて生活しているのでもない。

アーミッシュの生活を「衣･食･住」に分けて詳しく説明すると・・・

i.衣

女性には2種類の帽子があり、1つがコップと呼ばれる白のオーガンディで作られたもので髪の毛をおおうもの、もう1つは黒い布で作られたボンネットで頭部すっぽりおおうものである。ワンピースはシンプルで無地のもの、スカートの上には白か黒のエプロンをする。その上ケープで上半身を覆うのが普通である。男性は黒いつばの広い帽子、夏は麦わら帽子をかぶり、無地のシャツに吊りズボンをはいて、靴は黒といったスタイルがポピュラーである。外出や正装時には黒のジャケットやベストを身に着ける。

女性は髪を切ることを禁じられているので、真ん中で分けて後ろで束ねて、化粧をすることも宝石を身につけることもない。男性は髪を耳たぶのところで刈り、前髪も切るので分けることはない。結婚するまでは髭を剃るが、結婚すると髭をはやし、もみあげも伸ばして良い。

成人男女の衣服→

ii.食

彼らは自給自足の生活をしており、冷蔵庫を持たないので、畑や裏庭で採れた野菜や果物や肉類までもびん詰めにしたり、冷凍･乾燥させて保存する。週に一度か二度はパンをオーブンで焼いているが、ビスケットやケーキなど簡単なものを焼く時には、ダッチ・オーブンと呼ばれる3本の鉄製の脚のついた鍋が使われ、これは日本でもキャンプなどでよく使われている。また食事の時間は家族全員が顔を合わせる、家族の大切なコミュニケーションの時間となる。

iii.住

アーミッシュの家はたいていレンガ造りか木造二階建てで、白か灰色のペンキで塗られている。1階に広い居間と台所、2階には家族のそれぞれの部屋がある。カーテンや絵画、写真などの装飾となるようなものはひとつもない。また彼らの唯一の交通手段は馬車である。屋根なしの二人乗り、箱型の家族用、荷台付きワゴンなどがよく見かけられる。電気がないので、電話や電球はもちろんないが、“The Budget”と呼ばれる新聞で情報を伝え合い、ランプなどを使って生活している。

Ⅲ. Ordunung と Gelassenheit とは？

アーミッシュの社会は、自らのアイデンティティを維持するために伝統を重んじている。“Ordunung”とは、アーミッシュにとって非常に大切なものであり、衣服のこと、家具のことなど、きわめて具体的な事柄についての約束事である。また生き方の基本を“Gelassenheit”「従順・謙虚・服従・倹約・質素」とし、これを犯すことは罪を犯すことと同じであると考えている。彼らの人生の目的は従順で、礼儀正しく、家庭的な個人になり、社会より大きな目的の為に自らをささげることであり、彼らはこのような規則を守り、家族を大切にしながら生活をしているのである。私たちの社会ではテレビ・ラジオ・インターネットなどで情報が飛び交い、他人の評価を気にして慌しく生活しているが、アーミッシュは他人に評価されることを避け、ゆったりとした生活を送っているのである。また、「孤食」をしている日本の子どもたちにとってアーミッシュのように家族のとの時間を大切にすることが重要なのではないかと思う。

⑧学んだこと：従順で質素な生活をする中で培われる、謙虚さ・責任感・忍耐強さをもったアーミッシュの人々。いじめや少年問題が絶えず流れている日本において、子どもたちにはそのような心が必要なのではないかと思う。

⑨英語サマリー：The Amish have modesty, a sense of responsibillity and patience which are cultivated in their plain and simple life. In Japan, there are continually bullying and juvenile delinquency. I think that Japanese children should learn the mind and spirit of the Amish.

参　考　文　献

『森の生活』上・下　H.D.ソロー著　飯田　実訳　(ワイド版岩波文庫,2001)

『アーミッシュの人々』　池田　智著　(サイマル出版会,1995)

『アーミッシュの贈り物』　ジョセフ・リー・ダンクル著　(主婦の友の会,1995)